

2019年度事業の概要

1 調査と研究	30	公開講演会	42
飛鳥藤原京の発掘調査.....	30	第124回公開講演会.....	42
平城京の発掘調査.....	30	第11回東京講演会.....	42
企画調整部の研究活動.....	31	第125回公開講演会.....	43
文化遺産部の研究活動.....	32	研究集会	43
●歴史研究室の調査と研究.....	32	科学研究費等	44
●建造物研究室の調査と研究.....	33	学会・研究会等の活動	51
●景観研究室の調査と研究.....	33	国が実施する事業等についての調査・協力	52
●遺跡整備研究室の調査と研究.....	33	●平城宮・京跡の整備.....	52
埋蔵文化財センターの研究活動	34	●高松塚古墳壁画の保存のための調査研究.....	52
●保存修復科学研究室の調査と研究.....	34	●キトラ古墳に関する調査研究.....	53
●環境考古学研究室の調査と研究.....	35	現地説明会	53
●年輪年代学研究室の調査と研究.....	35	2 研修・指導と教育	54
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究.....	36	文化財担当者研修と指導.....	54
国際学術交流	36	京都大学（大学院）との連携教育.....	54
●中国社会科学院考古研究所との共同研究.....	36	奈良女子大学（大学院）との連携教育.....	54
●中国河南省文物考古研究院との共同研究.....	36	奈良大学への教育協力.....	54
●中国遼寧省文物考古研究院との共同研究.....	37	3 展示と公開	56
●大韓民国国立文化財研究所との共同研究.....	37	飛鳥資料館の展示.....	56
●西アジア・中央アジア諸国における文化財修復保存協力事業.....	37	平城宮跡資料館の展示.....	56
●カンボジア 西トップ遺跡の調査と修復.....	37	解説ボランティア事業.....	57
●ミャンマー考古・国立博物館局との技術移転・人材育成事業.....	38	図書資料・データベースの公開.....	57
●英国セインズベリー日本藝術研究所との研究交流.....	38	4 その他	58
●カザフスタン国立博物館との技術移転・人材育成事業.....	38	刊行物.....	58
●台湾中央研究院歴史語言研究所との研究交流.....	38	予算等.....	64
海外からの主要訪問者一覧	39	職員一覧.....	65
海外からの招へい者一覧	39	客員研究員一覧.....	66
奈文研研究者の海外渡航一覧	39		

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2019年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で5件、藤原京跡で1件、飛鳥地域で1件である。また、立会調査は7件である。以下、主要な調査成果について概要を記す。

藤原宮大極殿院の調査（第200次）は、大極殿院東面北回廊および内庭部の構造と状況の解明を目的とし、大極殿東北部（1179㎡）において実施した。調査期間は4月23日から10月23日である。調査の結果、東面北回廊の礎石据付痕跡7間分を検出した。桁行の柱間寸法は14尺だが、南から4間目と5間目だけは10尺であった。この柱間が狭い部分に、内庭側にのびる東西方向の大極殿後方東回廊（仮称）が取り付くことを初めて確認した。桁行7間分の礎石据付痕跡を検出し、その構造は大極殿院回廊と同じで桁行14尺、梁行10尺等間の礎石建ち、瓦葺き複廊形式であることがわかり、桁行総長28.7mの規模と判明した。回廊の基壇裾には沿うように数条の溝が掘られており、大極殿院の造営計画を復元する手がかりとなる。大極殿後方東回廊は大極殿後方の内庭部を区画する施設であり、東面回廊と一連の計画で設計、建築された。このことは、これまで指摘されていた藤原宮と前期難波宮との関連性をいっそう強く示し、古代宮都の変遷を考える上できわめて重要な発見となった。また、既往の調査（第20次）で検出した東西方向の掘立柱塀が大極殿後方東回廊の棟通りに沿うようにのびることが判明し、この掘立柱塀も同じように区画施設と考えられるようになった。このほか、藤原宮造営期の整地土や運河の迂回溝等を検出した。

水路改修にともなう藤原宮外周帯の調査（第201-3次）では、断定はしがたいものの、先行東一坊坊間路東側溝と同西側溝の推定地で、それぞれ南北溝を検出した。また、同じく水路改修にともなう藤原宮西南官衙地区（四分遺跡）の調査（第201-1次）では古墳時代の斜行溝を検出し、木製品や馬骨が出土した。このほか、住宅建設にともなう発掘調査では、藤原宮東方官衙南地区（醍醐環濠）の調査（第201-5次）で斜行溝や土坑等を、藤原宮内裏北官衙地区の調査（第201-9次）では整地土等を検出した。

藤原京跡では、市道（国道第165号小山線）の一部付け替え工事にともなう藤原京左京八条三坊東南坪の調査（第202次）を実施した。調査期間は11月18日から3月30日、調査面積は608㎡である。調査の結

果、藤原京期の柱穴や斜行溝等を検出した。北西方向に流れる斜行溝は藤原京期に埋め立てられており、出土した多量の土器のなかには円面硯が含まれる等、注目される。また、弥生時代後期の溝や土坑等が確認されるとともに、包含層からサヌカイト剥片が出土したことも考えあわせれば、調査地周辺に弥生時代の集落が存在していたと思われる。このほか、平安時代以降の掘立柱建物、石敷、南北溝等も検出した。

飛鳥地域では大官大寺南方で発掘調査（第203次）をおこなった。一昨年度より大官大寺から山田道までの南北450mの地域の様相を解明するために、地下探査と試掘調査を併用した調査をおこなっている。今年度は、昨年度（第199次）探査をおこなった範囲の南側約11000㎡を対象に、地中レーダー探査を実施した。試掘調査は、大官大寺の中軸線上で、藤原京東四坊坊間路の想定位置（120㎡）を調査した。試掘調査の結果、東西溝、南北溝、土坑等を検出した。東西溝は幅2m以上で、7世紀前半の土器とともに燃えさしや種実が出土した。大官大寺の造営以前における土地利用を考える上で重要な所見を得たといえる。

平城京の発掘調査

都城発掘調査部が平城地区において2019年度に実施した発掘調査は、平城宮跡で3件、平城京跡で6件、平城宮北方で2件である。以下、主要な調査成果について概要を紹介する。

平城宮内では、第一次大極殿院東方（第612次）および東方官衙地区（第615次・621次）の調査をおこなった。

このうち、第一次大極殿院東方の調査（第612次）では、平安時代初頭の掘立柱塀1条と素掘溝2条、および奈良時代とみられる掘立柱塀1条を検出した。平安時代の遺構はこれまでの周辺の調査でも確認しており、平城太上天皇の西宮の東外郭塀とそれにとりともなう排水溝と考えられる。奈良時代の遺構は希薄であり、第一次大極殿院や称徳天皇の西宮の東側は、空閑地として保たれ続けた可能性が高いことを再確認した。

東方官衙地区の調査（第615次）では、第二次大極殿院のほぼ真東、内裏外郭に隣接する区画に調査区を設定し、基壇建物3棟（東西棟1棟、南北棟2棟）、掘立柱建物1棟、築地塀1条、礎敷舗装等を検出した。東西棟基壇建物は、当該区画の南北中軸線上に位置し、官衙の中心建物と考えられる。礎石建ちで、桁行7間、梁行2間の身舎の南北2面に廂が付く。基壇

外装は凝灰岩切石による壇正積基壇で、基壇の南北両面に各3基の階段を確認した。建物規模は宮内官衙では最大級である。南北棟基壇建物は、東西棟基壇建物の南東と南西に隣接して検出した。東西棟基壇建物と、過去に南方の調査で確認した南北棟建物とを接続する機能をもつ可能性が考えられる。今回検出した官衙は、東西棟基壇建物の規模や格式の高さ、建物配置の特異性等から、太政官の弁官曹司と推定される。また、第621次調査は、第615次調査区の西側に重複させて調査区を設定し、2020年度にかけて調査を継続している。

平城京城では、左京二条二坊十一坪（第611次）、同十五坪（第613次）、興福寺旧境内（第614次）、法華寺境内（第616次）、東大寺東塔院（第617次）、法華寺庭園（第618次）の調査をおこなった。

このうち、東大寺および奈良県立橿原考古学研究所と共同でおこなった東大寺東塔院の調査（第617次）では、東面・北面・西面廻廊と東門・北門・西門について、それぞれ創建期（奈良時代）と再建期（鎌倉時代）の遺構を検出した。再建時には、門や廻廊の梁行規模を縮小し、創建期の基壇を切り縮める等大きな変化があったことが、各遺構の具体的な規模とともにあきらかとなった。また、廻廊東北隅部では、創建時に斜面を大きく切り崩して平坦面を確保していることが判明した。今回の成果により、創建期・再建期とも四面の門を含む廻廊全体の推定復元が可能となった。

左京二条二坊十一坪の調査（第611次）では、奈良時代の掘立柱建物4棟、礎石建物1棟、掘立柱塀1条、溝3条、礫敷等を検出した。遺構は調査区の北半と南半に分かれ、それぞれ4時期の変遷が想定できる。十一坪では、これまでに本調査区の北方で、東西対称に整然とした配置をとる奈良時代前半の大型掘立柱建物群を検出しており、遺構の配置や出土軒瓦の共通性から、南接する十二坪と密接に関連する公的施設の可能性が指摘されている。今回検出した建物の一部は北方の建物群と柱筋が揃い、調査区南部では奈良時代前半に2回の建て替えが認められる等、十一坪の利用状況についてさらなる知見を加えることができた。

法華寺境内の調査（第616次）では、防犯施設改修にともなう狭小な調査区であったものの、想定位置で礎石建物の掘付掘方2基と下層の掘立柱建物の柱穴3基を検出した。掘立柱建物の柱穴には重複がみられ、建て替えの可能性が考えられる。

法華寺庭園の調査（第618次）では、庭園の南部に3ヵ所のトレンチを設けた。調査の結果、現状の池の護岸は、胴木の上に自然石を3～4段積み重ねて構築

していること、裏込の浸食が進んで空隙が生じたことが護岸崩壊の要因とみられること等があきらかとなった。また、当初の作庭は江戸時代前半におこなわれた可能性が高いことが判明した。法華寺庭園について考古学的な知見を得たのは初めてで、今後の保存活用の手がかりになるとともに、名勝としての価値を裏付ける重要な成果といえる。

上記のほか、平城宮北方において、小規模な発掘調査（第619次・620次）を実施した。第619次調査区は西一坊大路と一条北大路との交差点付近にあたり、中世の堀とその埋土を掘り直して構築した近世の堀を検出した。第620次調査区は一条北大路の東延長上にあたり、中世の堀と塀を検出した。いずれも、中世の堀は超昇寺城に関わるものとみられる。

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の文化財担当者に対する専門的な研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報内容の充実、国際的な文化財の調査や保護に関する協力・支援と学術交流・研修、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動といった事業を実施している。また、奈良文化財研究所がおこなう様々な事業について、全体的・総合的な企画としての調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

文化財担当者専門研修では、企画調整室が中心となって立案した年度ごとの計画にしたがって、遺跡や遺物等の文化財の調査や、その成果の整理と保存・活用に関する高度で専門的な研修を実施している。2019年度は、専門研修14課程を実施し、延べ199名が受講した。また、研修受講者に対するアンケート調査では、100%の受講者から、今回受講した研修が「有意義だった」あるいは「役に立った」との回答を得た。

文化財情報研究室がおこなっている文化財情報電子化の研究では、発掘調査報告書に関するデータベースである全国遺跡報告総覧を研究所ホームページにて公開しており、国の内外より極めて多くのアクセスを得ている。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的に実施しており、各種データベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。また、調査研究成果の電子化として、ガラス乾板・35mmスライドフィルム・建造物保存図等のデジタル化を進めている。

国際遺跡研究室が主管する文化財保護に資する国際協力には、①1993年から継続しておこなっているカンボジアとの共同研究事業、②文化庁受託事業である文化遺産国際協力拠点交流事業、③セインズベリー日本藝術研究所（英国）との研究交流、④ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修への協力事業がある。

①では、王都アンコール・トム内の西トップ遺跡にて、現地文化財保護機関の国立アプサラ機構（アンコール・シムリアップ地域保存整備機構）と共同で調査および修復を進めている。

②では、カザフスタン共和国国立博物館を相手国拠点として、考古遺物の調査・記録・保存を目的とした交流事業「カザフスタンにおける考古遺物の調査・記録・保存に関する技術移転を目的とした拠点交流事業」を推進している。

③では、日本考古学の国際的研究の推進事業を共同で実施することを目的に、日本の文化財に関するオンライン・リソースの共同開発や、日本考古学の英文解説書の刊行、同研究所が企画中の特別展 Arrival of Beliefへの協力等をおこなっている。

④では、ACCU主催の研修事業や国際研究集会への研究者の派遣や運営協力をおこなっている。

なお、このほかの国際共同研究としては、都城発掘調査部が中心となっておこなっている中国社会科学院考古研究所、河南省文物考古研究院、遼寧省文物考古研究院（以上、中国）との共同研究、国立文化財研究所（韓国）との共同研究、国立慶州文化財研究所（韓国）との発掘調査交流、中央研究院歴史語言研究所（台湾）との研究交流等がある。

展示企画室では、平城宮跡資料館にて、春期特別企画展「高御座―奈良朝の玉座―」、夏の子ども展示「ならのみやこのしょくぶつえん」、秋期特別展「地下の正倉院展―一年号と木簡―」、冬期企画展「発掘された平城2019」を開催したほか、2020年1月に新春ミニ展示「平城京の子」を実施した。また、都城発掘調査部と協力して、第一次大極殿内で幢旗レプリカの特別公開を2019年4月27日から2020年1月5日までおこなった。

写真室では、研究所内の各文化財記録写真の撮影、写真データの保存管理をおこなっている。また、写真記録の高精度・効率化を目的に様々な撮影手法の開発もおこなっている。さらに近年では、地方公共団体や関連機関が実施する文化財写真の研修会等に講師として出講しているほか、都城発掘調査部がおこなう中国との共同調査に参加している。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室をおき、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。各研究室における調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等、国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をしている。

2019年度は、仁和寺・唐招提寺・興福寺・薬師寺・当麻寺・法華寺・三佛寺・東大寺や、奈良関係の旧家等が所蔵する歴史資料・書跡資料調査を行った。

仁和寺の調査では、御経蔵聖教第87函～第98函の調書原本校正・写真撮影を実施した。また、御経蔵第150函の古文書について、釈文を詳細に検討し、奈良文化財研究所史料第94冊『仁和寺史料 古文書編2』を刊行した。

唐招提寺の調査においては、掛軸・印信の整理作業や、聖教第8函の写真撮影等を行った。また宝蔵の鎌倉時代の木札に関する考察を公表した。

興福寺の調査をおこない、井坊家記録の調書作成・二条家記録の写真撮影を実施した。

薬師寺においては、未整理の新出資料を調査・整理した。また第26函の写真撮影を行った。

当麻寺が所蔵する未整理の経典を調査し、開被作業と、東6函～10函の調書作成作業を行った。

法華寺所蔵の未整理の歴史資料を調査し、その全貌の把握に努めた。また、三佛寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、近世文書第7函の調書作成・経典の整理作業をおこない、行場関係資料を公表・紹介した。

さらには、金峯山寺関係の個人蔵の歴史資料について調査を実施し、調書作成・写真撮影を進めた。

氷室神社宮司の大宮家所蔵文書につき、奈良市教育委員会と連携研究「大宮家文書の共同研究」の協定を結んだ。函文書の調書を作成し、写真撮影を進めた。

また、東大寺所蔵の新修東大寺文書聖教・興福寺関係の個人所蔵資料について、科学研究費補助金も充当

して調査・写真撮影を実施した。

その他、調査協力の依頼を受けて、石山寺文化財調査・東大寺貴重書調査・文化庁による仁和寺聖教調査等に協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群に関する調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復、活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法の調査研究を、現存建物のみならず、修理等の際に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。以下2020年度におこなった調査研究内容を紹介する。

基礎的な調査研究として、奈良県内の社寺建築の悉皆調査および大和高田市にある十二社神社本殿の調査をおこなった。受託研究業務としては、前年度からの継続事業として、湯浅町から受託した湯浅町内重要建造物の調査では、前年度の調査成果を報告書として刊行した。日本綿業倶楽部から受託した重要文化財綿業会館保存活用計画改訂にともなう検討では、保存活用計画の改訂版を作成し、計画は2020年3月に認定された。

さらに、2020年度新規受託業務として、以下の調査研究業務を受託した。高野町から受託した高野町文化財保存活用地域計画調査研究および、湯浅町から受託した湯浅町内歴史的建造物悉皆調査では、各自自治体が策定する文化財保存活用地域計画の基礎資料となるよう、各自自治体内の歴史的建造物の悉皆調査をおこない、町内歴史的建造物の基本台帳を作成した。徳島県から受託した「あわの至宝」調査・発信業務における建造物調査では、県南部の社寺建築の悉皆調査をおこない、県南部における社寺建築の新たな価値をあきらかにした。高山市から受託した高山市料亭州さき建造物調査では、江戸時代に建築され近代に増改築された料亭建築について、詳細な調査をおこない、近代料亭建築としての価値をあきらかにし、2021年度に報告書を刊行する予定である。日南市から受託した日南市飢肥歴史的建造物活用ガイドライン作成のための調査研究では、日南市所有の市指定文化財3件について、現地調査のうえ、今後の保存活用にむけてのガイドラインを作成した。

この他、各地で実施されている文化財建造物保存・史跡整備事業等について指導・助言をおこなっている。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、文化的景観を主な対象として、その概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取り組んでいる。また、文化的景観保護に係る基礎的情報の収集・整理・検討・公開を進めつつ、文化的景観の具体的事例に関する取組として、地方公共団体からの受託研究等を通じて、保護措置の諸問題について検討を重ねている。

今年度は、文化的景観と民俗学との関係をテーマとする文化的景観研究集会（第11回）を企画し、それに向けた情報収集や民俗学研究者との内容検討をおこなった。開催を3月に予定、準備したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため次年度に延期した。また、前年度に開催した文化的景観研究集会（第10回）「風景の足跡—考古学からの文化的景観再考—」の報告書を刊行した。

その他、以前から当研究所ウェブサイトにおいて公開している日本全国の重要文化的景観選定地区の概要について、最新情報を追加した。

地方公共団体からの受託研究については、前年度に引き続いて京都市から調査研究を受託した。京都市の文化的景観について平成27年度から今年度にかけて実施した調査の成果をとりまとめ、「京都の文化的景観」調査報告書の執筆・編集・刊行をおこなった。また、新たに鳥取県智頭町から重要文化的景観「智頭の林業景観」の整備計画策定に向けた調査を受託し、智頭宿、芦津、東山・沖ノ山地区において、土地利用、建造物、水系、森林鉄道跡等、文化的景観の構成要素に関する現地調査等をおこなった。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、遺跡等の整備と庭園について調査研究をおこなっている。

遺跡等の整備については国際的な動向も視野に入れながら、主として国内に所在する遺跡等の保存・活用およびそのための整備事業について、理念や計画、設計、技術に関する調査研究をおこなっている。

2019年度は、前年度おこなった遺跡整備・活用研究集会の報告書『史跡等の保存活用計画—歴史の重層性と価値の多様性—』を刊行した。研究集会での報告の他、各地の史跡等の保存活用計画の事例を紹介している。関連論考では計画において留意すべき構成要素についてや、移築された本質的価値の構成要素をどのように考えるかについて、明治初期からおこなわれた官有地化による記念物の保護の歴史があることを踏まえた保存・整備の歴史を計画書に書き込むことの必要

性について触れている。また、「歴史的脈絡に因む遺跡の活用—儀式・行事の再現と地域間交流の再構築—」をテーマとして遺跡整備・活用研究集会を3月末に開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の措置として延期とした。

平城宮跡の活用に関しては、平城宮跡活用の実践的研究として、次年度と次期中期計画の期間における計画の検討をおこなった。また、令和元年度が改元即位の年であることから、即位関連遺構の周知を図る試みを行った。一つは第一次大極殿前で近年認識されるようになった幢旗遺構の位置に、幢旗の原寸大CGを立ち上げるARを製作し、第125回公開講演会に併せて現地での体験会を実施した。二つめは東区朝堂院で遺構表示している大嘗宮遺構を説明するリーフレットを製作した。さらに、平城宮跡出土木簡に因み、兵庫県養父市立八鹿小学校児童が赤米を作って持参する取組があり、その受け入れをおこない、平城宮跡と関連のある遺跡・地域との関係性の再構築により、今後の遺跡の活用の展開を考える契機となった。

キトラ古墳整備活用関係では特別史跡キトラ古墳の墳丘近くに壁画の残存状況を示す乾拓板が設置されているが、春・秋・冬の壁画公開に併せ、国営飛鳥歴史公園と共催で遺跡見学と乾拓板の活用を行う体験学習会をおこなった。

庭園の調査研究については、2016年度から継続している「庭園の歴史に関する研究（近世庭園）」の4年目として、11月24日に「庭園文化の近世的展開」をテーマとした研究会を開催した。年度末にその内容を取りまとめた報告書を刊行し、庭園文化が各地方、各階層に広がりを見せた時代における庭園について、個別の報告を基に議論した成果をまとめた。

また奈良市教育委員会との連携研究として進めている「奈良市における庭園の悉皆的調査」については、報告書の編集作業を進めた。

さらに、森蘊旧蔵資料・村岡正旧蔵資料の整理およびデジタル化を進め、これらの展示活用について企画立案をおこなった。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターは、遺跡・調査技術研究室、環境考古学研究室、年代学研究室および保存修復科学研究所の4室からなり、文化財の調査、研究および保存に関して先進的に取り組んでいる。これらの研究成果は、文化財担当者研修やワークショップを実施するこ

とで、広く普及が図られている。また、国や地方公共団体の要請に基づき専門的な助言や協力を行っている。2019年度の各研究室の活動内容は以下のとおりである。

●保存修復科学研究所の調査と研究

文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究および調査手法の研究・開発を推進するため、1) 考古遺物の保存処理法に関する調査研究、2) 遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究、3) 建造物の彩色に関する調査研究、4) 古墳壁画の恒久的保存に関する調査研究を実施している。

1) では保存処理法の開発に関する研究として、①鉄製遺物を対象とした新規脱塩法の開発に関する基礎研究、②鉄製遺物の安全な保管・管理システムの構築を目的とした、鉄製遺物の埋蔵環境がそれらの劣化特性におよぼす影響に関する基礎的検討、③木製遺物の保存処理における効率的な薬剤含浸法の開発に関する基礎研究を実施した。さらに、種々の材料調査分析法を総合的に活用して出土遺物の材質・構造に関する診断調査を実施するものとして、④蛍光X線分析法等の分析手法を応用したガラス玉等の材質構造調査、⑤高エネルギーX線CTを用いた金属製遺物の構造調査、および、⑥考古遺物の分析方法の標準化に取り組んだ。また、「遺跡保存に関する最近の動向」をテーマとした研究集会を3月に企画したが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行拡大により研究集会については開催を延期することとした。2) では①石造文化財に多用される砂岩を対象として、石材の破壊特性に関する諸物性値に対して、石材の水分状態がおよぼす影響について検討するとともに、石材の乾湿繰り返し劣化のモデル化を試みた。また、②土壌カラム実験による埋蔵環境のモデル化、および埋蔵環境下における金属製遺物腐食のモデル化に関する研究を実施した。フィールド調査としては、③塩類が析出することで著しい劣化が進行していた大分市元町石仏において環境調査を実施するとともに、石材からの塩類除去法を検討した。また、④高槻市ハニワ工場公園では環境調査と塩析出に対する遺構展示館内の照明設備や換気の運用方法の影響について検討した。3) では①平城宮跡復原大極殿において引き続き外界気象の実測調査と塗装の劣化状態調査をおこない、周辺環境が塗装の劣化におよぼす影響について検討した。4) では①ガランドヤ古墳1号墳において石材表面での結露を抑制する環境制御法の検証、および同2号墳の温熱環境調査と保存環境の検討、②模擬古墳を用いた金属製遺

物の古墳石室内での腐食挙動に関する検討、③宮崎市蓮ヶ池横穴群において、横穴が穿たれた岩盤表層の劣化状態調査および温熱環境調査をおこない、横穴の公開・活用を可能とする保存環境の制御方法について検討した。

受託事業として、船原古墳出土遺物の構造調査（古賀市）、松帆銅鐸・舌の調査研究（南あわじ市）、元町石仏の塩害を抑制する覆屋運用手法および石仏からの脱塩手法に関する検討業務（大分市）、令和元年度紀伊風土記の丘出土玉類自然科学分析業務委託（和歌山県）、鳥取県における弥生時代青銅器の調査研究（鳥取県立公文書館）、史跡闘鶏山古墳の調査保存に資する基礎的調査研究（高槻市）の6件を実施した。また、連携研究として、国史跡石清尾山古墳石棺および同質石材石棺の乾湿風化に対して周辺環境がおよぼす影響の検討（高松市）を実施した。

国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務（文化庁）ならびに特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務（文化庁）および文化庁キトラ古墳壁画保存管理施設（キトラ古墳壁画体験館 四神の館内）の管理・運営業務（文化庁）において、壁画の劣化原因究明および修理のための材料調査、高松塚古墳石室石材の安定化対策、四神の館における壁画保存環境の調査と管理をおこなった。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、動物考古学を中心とした環境考古学の調査研究を実施し、国内外の発掘調査や整理、報告書作成の協力および助言をおこなっている。

今年度の発掘調査や整理、報告書作成として、中沢浜貝塚（岩手県）、金井下新田遺跡（群馬県）、前田耕地遺跡（東京都）、保美貝塚（愛知県）等の遺跡から出土した動物遺存体を分析した。

東日本大震災の復興事業にともなう調査支援は、波怒棄館遺跡や台の下貝塚（以上、宮城県）、堂の前貝塚（以上、岩手県）の整理作業や報告書作成を継続的に進めた。台の下貝塚（縄文時代中～後期）では、約60,000点の動物遺存体を分析した。貝類は、岩礁に群棲するムラサキイナゴをブロックで大量に採集する一方で、砂浜部に生息するアサリや転石地等様々な環境に生息するマガキ等も採集していた。魚類は、ニシン科、カタクチイワシ、サバ属といった小型回遊魚を積極的に利用しつつ、岩礁を好むアイナメ属や砂泥底に生息するカレイ科等、多様な生態を持つ魚類を漁獲していた。また、ニホンジカやイノシシを中心に狩猟し、ニホンジカの骨や角等を素材とする骨角器を製作

していた。

研究成果の発信として、日本動物考古学会、日本植生史学会、日本花粉学会、海洋考古学会等で研究発表をおこなった。社会還元や普及事業として、『骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事』の展示や図録作成に携わり、「研究員を展示！」のイベントや「体験！研究員のお仕事（子供向け・大人向け）」という体験講座も実施する等、研究を身近に感じてもらう取り組みを積極的におこなった。そのほかにも、愛知県、新潟県、大阪府で一般向けの講演をした。

現生標本の収集と公開では、マグロ類やウニ類の標本を作製し、標本見学に対応した。

●年輪年代学研究室の調査と研究

年代学研究室では、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の文化財に関わる諸分野の研究に資するべく、出土遺物、建造物、美術工芸品等、多岐にわたる木造文化財の年輪年代調査を実施している。また、標準年輪曲線の拡充による木造文化財の産地推定や、年輪年代学的手法による同一材の推定、マイクロフォーカスX線CTを用いた非破壊調査手法の活用等、年輪年代学に関する基礎研究や、年輪年代学を応用した文化財の科学的分析手法の研究開発をおこなっている。

出土遺物の調査・研究では、京都府岡田国遺跡において出土した奈良時代中頃と考えられている井戸の井戸枿材について、伐採年代を推定すべく年輪年代調査をおこない、西暦725年に伐採された縦板を見出した。岡田国遺跡は、恭仁京の範囲内と考えられているが、恭仁京内における年代測定事例は少なく、本成果は貴重な年代情報になり得ると期待される。また、鎌倉幕府の三代将軍・源実朝の姿を現代に残す最古の像として知られる、甲府市・甲斐善光寺に伝わる木造源実朝坐像が解体修理されるのにもとない、年輪年代調査を実施した。現在、解体された部材23点を調査対象とした検討を進めており、今後、本像の製作年代推定に資する年輪年代成果があげられることが期待される。この他に、近年実施している年輪年代学的手法による同一材由来の推定に関して、平城宮・京跡から出土した参河三嶋贄荷札について年輪年代学的検討をおこない、同一遺構出土で、記載内容が一致または類似する荷札に、同一材由来と考えられる組が見出される等の成果があがっている。

このように、年輪年代学に関する調査・研究を通して、各種文化財に資する様々な情報を提供することができた。従来、主に年代測定の手段として使用されることの多かった年輪年代学を、同一材推定の視点から

木簡へ応用を継続的に進めている点も、今年度の大きな特徴である。今後、古代史学への貢献が期待される等、年輪年代学による調査・研究が発展的に進展するものと考えられる。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室では、主に遺跡から得られる諸情報の研究およびその調査手法について検討をおこなっている。

2019年度は、以下の点について活動を進めた。

遺跡研究としては、従来から継続している古代の官衙遺跡の情報収集として遺構の収集と整理をおこなった。加えて、寺院・官衙における情報について追加をおこなった。これらの作業により抽出したデータをデータベースとして公開している。また、皇朝十二銭と銚帯金具についてのデータの収集もあわせておこなっている。加えて、古代官衙・集落研究集會を開催し、研究報告資料『灯明皿と官衙・集落・寺院』および資料集を刊行した。

また、考古資料および文献資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開をおこない、発掘調査データからの災害痕跡データの抽出をおこなった。また、発掘調査現場における災害痕跡の調査、資料採取、分析、報告を通じて防災および減災に寄与する遺跡からの歴史的な情報の抽出を進めている

調査手法の開発としては、SfM・MVS、RTIおよびLiDARを中心とした三次元計測手法の洗練化と対象の拡大を主眼とし、遺跡周辺地形の抽出、森林下における計測機器の移動経路の記録や微地形の確認、土器・瓦等の迅速で詳細な計測、微細資料の計測、機械による自動化の試行等をおこない、成果を得た。また、自治体等の依頼により、三次元計測のワークショップを日本各地で開催し、低コストで実用可能な技術について、その有効性と限界を考慮しつつ普及する活動をおこなっている。

また、多チャンネルによる探査機器の試用を進め、位置情報との連動等、より迅速かつ高密度での遺跡の地下情報の取得を可能とする試験を奈良県内はじめ九州・中国地方でおこない、発掘調査や史跡整備の前提となる情報の取得をおこなった。

加えて、被災地への支援として、熊本県下の被災装飾古墳の三次元計測および探査をおこない、被害状況の基礎的な資料を作成した。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、以下に紹介する通り、中国・韓国・カンボジア・カザフスタン・英国・台湾等に所在する諸機関と協約・協定等を締結し、学術共同研究や各種の交流事業を展開している。中でもカンボジアにおける事業は長期にわたり継続しており、今年度は奈文研のカンボジア事業25周年を記念する式典をアンコール遺跡群内の西トップ遺跡において開催した。また、2016年度から2018年度にかけてミャンマーを対象とした文化庁の委託による文化遺産国際協力拠点交流事業の報告書を刊行するとともに、今年度新たにカザフスタンを対象国とする拠点交流事業を実施した。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

本年度は両研究所間での学術交流が研究活動の中心となった。

10月8日から11月15日の39日間、都城発掘調査部考古第三研究室の石田由紀子主任研究員を中国社会科学院考古研究所に派遣し、学術交流を実施した。中国では、北齊鄴城、唐長安城、隋唐洛陽城、揚州城等の遺跡に一定程度滞在し、発掘調査への参加、関連遺跡および遺物の調査を実施した。11月12日に中国社会科学院考古研究所にて「藤原宮出土瓦の年代と生産体制」と題して講演をおこなった。

11月1日から12月1日にかけての1カ月間、中国社会科学院考古研究所の周振宇氏と唐錦琼氏を日本に招へいし、学術交流をおこなった。東大寺東塔院の発掘調査に参加し、日本における遺構の状況や発掘方法について議論した。そのほか、関西地方を中心に関連遺跡や遺物の調査を実施した。11月26日には奈文研において講演会をおこなった。周は「旧石器時代の火を用いた技術 寧夏回族自治区水洞溝遺跡を例として」、唐は「江蘇省蘇州木瀆古城遺跡の発掘調査と研究（東周～漢代）」と題して、それぞれ現在の研究成果や発掘調査を紹介し、奈文研の研究員からさまざまな質問、意見があった。

●中国河南省文物考古研究院との共同研究

奈良文化財研究所と河南省文物考古研究院は、2015年3月19日締結の「友好共同研究議定書」第4条と「友好共同研究覚書」の関連規定にもとづき、鞏義市黄冶・白河唐三彩窯跡の考古学的研究を実施してきた。現在は両窯跡出土品の整理、調査・研究を共同

で継続的に実施している。2016年度に『鞏義黄冶窯』中国語版報告書を刊行し、現在は日本語版の刊行にむけての作業を進めている。

2019年度は、共同研究第4期5カ年計画の5年目にあたる。2002年から2004年にかけて発掘調査した河南省鞏義市黄冶窯跡と2005年から2007年にかけて発掘調査した同市白河窯跡から出土した資料の整理作業を進め、『鞏義黄冶窯』日本語版の刊行にむけての作業をおこなった。あわせて、唐三彩関連資料の調査も実施した。2017年度における共同研究に関わる相互の交流は、下記のとおりである。

2019年12月16日から12月20日まで、河南省文物考古研究院は郭子樺、魏興濤、趙文軍、慕俊紅、閆海濤の5名の研究者を派遣し、奈良文化財研究所を訪れ学術交流をおこなった。

2020年2月に奈良文化財研究所は河南省文物考古研究院に研究者を派遣する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、やむを得ず派遣を中止した。現在、「友好共同研究議定書」と「友好共同研究覚書」の改定に向け、協議を進めている。

●中国遼寧省文物考古研究院との共同研究

奈良文化財研究所と遼寧省文物考古研究院は、2017年5月に取り交わした友好共同研究協定書にもとづき、「三燕文化出土遺物の研究」と題する共同研究を遂行している。本年度は、9月6日から11日にかけて、馬宝傑院長、郭明副研究館員、柏芸萌副研究館員、褚金剛館員の4名を招へいし、今後の共同研究の進め方を協議するとともに、日本の関連資料や遺跡、文化財の保存・活用状況等を視察した。

奈良文化財研究所からは、11月11日から18日にかけて、廣瀬覚、大澤正吾、田村朋美、松永悦枝、栗山雅夫、小池伸彦、諫早直人の7名を遼寧省文物考古研究院に派遣し、大板管子墓地、喇嘛洞墓地、錦州李廐墓、三合成墓、袁台子壁画墓等から出土した土器、金属器の調査をおこなった。

また、2015年度に実施した日中学術研究会の成果を学術論文集『東アジア考古学論叢Ⅱ—遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究—』（奈良文化財研究所学報第98冊）として刊行した。

●大韓民国国立文化財研究所との共同研究

奈良文化財研究所と大韓民国国立文化財研究所とは2005年12月に研究交流協定書、共同研究合意書、発掘調査交流合意書を更新し、これにもとづき「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」および相

互派遣による発掘調査交流を実施している。今年度は5カ年計画の4年目にあたる。

共同研究については、日韓双方の協議を経て設定した課題にもとづき、5回の派遣と5回の受入を実施する予定であったが、新型コロナウイルスの影響等を受け、3回の派遣と3回の受入を実施するに留まった。なお、2020年度には共同研究の総括として『日韓文化財論集Ⅳ』を刊行する予定である。

発掘調査交流については、奈良文化財研究所より国立慶州文化財研究所へ研究員1名を派遣し、新羅関連遺跡等において共同発掘調査を実施した。派遣期間は約1ヶ月半であった。なお、国立慶州文化財研究所から研究員1名を受入れる予定であったが、日程等に不都合が生じ、受入が中止となった。

●西アジア・中央アジア諸国等における文化財修復保存協力事業

当事業においては、近年は西アジアや中央アジア諸国の文化遺産保護に関する情報収集や関連分野での学術交流を続けている。2019年度の開催および主体的な参加行事は以下の通りである。第64回国際東方学者会議・SymposiumⅢ「ソグド人研究の新展開」（5月、京都）、国際セミナー「中央アジア西部の仏教遺跡と出土壁画について：ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土壁画を中心に」（10月、奈良）、講演会「シルクロードの国際商人—ソグド人の壁画と装具—」（2月、奈良）。その他、関連するシンポジウム等に研究員を派遣した。

●カンボジア 西トップ遺跡の調査と修復

カンボジアとの共同研究では、2002年より対象遺跡をアンコール・トム内の西トップ遺跡に定め、調査研究をおこなってきた。2012年より修復事業を開始し、2015年に南祠堂、2017年に北祠堂の修復が完了した。現在、中央祠堂調査修復として基壇外装の解体・再構築を進めており、2019年3月に北西部、7月に南東部が完了した。8月以降に中央祠堂前面に位置する台座の解体・再構築調査ならびに発掘調査をおこなった。当事業開始より25年を経過したことを受け、2019年12月2日に、奈良文化財研究所カンボジア事業25周年記念式典を西トップ遺跡で開催した。式典には当事業に多大なご貢献をいただいた（株）タダノ多田野宏一代表取締役社長、左野勝次氏、在カンボジア日本国大使館三上正裕大使、カンボジア側からはAPSARA機構副総裁キム・ソティン氏をはじめ多くの関係者の方々にご参列いただいた。

●ミャンマー考古・国立博物館局との技術移転・人材育成事業

奈良文化財研究所は、2016年度から2018年度にかけて文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業を受託した。事業自体は2018年度をもって終了したが、2019年度はその具体的な内容を報告書としてまとめ、刊行した。同報告書では、事業の核となった招へい研修および現地研修の詳細だけでなく、ミャンマー南東部モン州コー・ター窯跡の発掘調査の成果や、シュリ・クシェトラ遺跡における集団埋蔵墓遺構の3次元測量の成果等、同事業を通じて得られた学術的な成果についても報告した。

●英国セインズベリー日本藝術研究所との研究交流

奈良文化財研究所と英国のセインズベリー日本藝術研究所（Sainsbury Institute for the Studies of Japanese Arts and Culture）は、2015年12月に日本考古学の国際的研究の推進事業を共同して実施することを目的に、共同研究の協定を締結した。以来、日本の文化財に関するオンライン・リソースの共同開発や、2005年にドイツで開催した日本の考古学展「曙光の時代」の解説書の英語版の刊行をおこなってきた。本年度は、共同研究内容に関する協議（4月、奈良）、国際セミナー「シルクロードの両極における信仰の伝来」（6月、奈良）等をおこなった。

●カザフスタン国立博物館との技術移転・人材育成事業

奈良文化財研究所は、令和元年度の文化庁文化遺産国際協力拠点交流事業を受託し、カザフスタン国立博物館を交流対象として、「カザフスタンにおける考古遺物の調査・記録・保存に関する技術移転を目的とした拠点交流事業」を実施した。9月にカザフスタン国立博物館に研究員を派遣しておこなった事前協議にもとづき、11月に現地研修「日本における最新の土器研究法」、翌年1月に招へい研修「考古遺物の調査・記録・保存方法」を開催した。より充実した研修を実施するために、研修テキストのロシア語訳作成、カザフスタン出土遺物の考古科学的分析、カザフスタン国立博物館と海外の研究機関との共同事業についての情報収集も、あわせておこなった。

●台湾中央研究院歴史語言研究所との研究交流

木簡の分野では2019年度は、IIIF（トリプルアイエフ）準拠による簡牘・木簡文字画像の連携検索にむけた具体的な作業をおこない、「IIIFにもとづく歴史

的文字研究資源情報と公開の指針」を宣言し「オープンデータに関する仕様」を策定した。また、上記仕様にもとづく検索ポータルサイトをそれぞれ開発し、運用の準備を進めた。

海外からの主要訪問者一覧

- 英国/セインズベリー日本藝術研究所/ '19.4.2/共同研究打合せ
- 英国/Queen's College/ '19.4.3~4.10/シンポジウム発表、研究打合せ
- 英国/ヨーク大学/ '19.4.3~4.13/シンポジウム発表、研究打合せ
- 台湾/中央研究院・研究員 李 匡悌/ '19.4.4~4.9/シンポジウム発表、研究打合せ
- 英国/ケンブリッジ大学/ '19.4.5~4.9/シンポジウム発表、研究打合せ
- タイ/CRMAリサーチセンター・所長 Surat Lerltum/ '19.5.14/奈文研訪問、ワークショップ
- フランス/College de France/ '19.5.15/奈文研訪問、木簡見学
- モンゴル/ハラホリン市議 Sodbaatar Yangug ほか5人/ '19.5.19~5.21/平城地区、飛鳥・藤原地区視察および所長面談
- 韓国/国立慶州博物館・学藝研究官 黄銀順/ '19.6.19/平城宮跡、周辺見学
- ブラジル/サンパウロ大学・講師 メルセデス・オクムラ/ '19.6.24/国際遺跡研究セミナー参加
- 英国/セインズベリー日本藝術研究所4人/ '19.6.25~6.26/セミナー開催、斑鳩地区・飛鳥地区視察
- 英国/ケンブリッジ大学/ '19.7.8~7.19/資料調査
- メキシコ/考古学研究センター・教授 Joshua D. Englehardt/ '19.7.9/木簡見学、打ち合わせ
- インドネシア/インドネシア科学院・研究員 Fadjar I. Thufail, Marsis Sutopo, Isni Wahyuningsih 3人/ '19.7.10/国際遺跡研究セミナー参加
- 中国/西北大学 文化遺産学院・院長 段清波 ほか4人/ '19.7.18/保存修復科学研究室訪問
- キルギス/スライマンートー国立歴史考古博物館科学課歴史室・副課長 ハイロ・イバイドゥラエフ ほか1人/ '19.7.25,26,31~8/2/ ACCU個別テーマ研修2019「博物館収蔵品の記録と保存活用」
- タジキスタン/タジキスタン国立考古博物館考古室・研究員 ボボムロ・ボボムロエフ ほか1人/ '19.7.25,26,31~8/2/ ACCU個別テーマ研修2019「博物館収蔵品の記録と保存活用」
- ウズベキスタン/ウズベキスタン国立歴史博物館貨幣調査室・貨幣コレクション担当学芸員 バフティヤール・コドジャエフ ほか1人/ '19.7.25,26,31~8/2/ ACCU個別テーマ研修2019「博物館収蔵品の記録

と保存活用」

- 英国/ケンブリッジ大学/ '19.7.29~7.31/打合せ、資料調査
- アメリカ/プリンストン大学・助教授 Bryan D./ '19.7.31/表敬訪問、研究交流
- イタリア/ICOM-CC,事務局ほか 計49人/ '19.9.5/ICOM-CCオフサイトミーティング、施設見学
- ベトナム/タンロン・ハノイ文化財保存センター・副センター長 Nguyen Thanh Quang ほか2人/ '19.9.5/所長表敬・施設見学
- 中国/杭州市都市計画設計研究院・副総技師 潘 蓉 ほか19人/ '19.11.26/奈良の文化財の保存、遺跡の保護について視察
- 中国/天津大学・副教授 丁 壺 ほか5人/ '19.12.6/平城宮・京における建築史研究に関する意見交換
- 韓国/元中原文化財研究院長 金 武重 ほか1人/ '19.12.12~12.14/研究発表、古代官衙研究会に参加
- 韓国/中央大学校人文大学歴史学科・助教授 李 在暎/ '20.1.22/施設・資料見学、研究交流
- 中国/陝西省考古研究院 孫 戰偉 ほか1人/ '20.2.12/整理室見学

※EEA加盟国からの訪問者の氏名・役職はEU一般データ保護規則により掲載していません。

海外からの招へい者一覧

- 趙 志軍(中国社会科学院考古研究所科技考古中心・副主任) /中国/ '19.4.5~4.9
- 王 金華(復旦大学文物与博物館学系・教授) /中国/ '19.5.30~6.5
- 陳 嘉琦(復旦大学文物与博物館学系・博士課程・学生) /中国/ '19.5.30~6.5
- 馬 宝傑(遼寧省文物考古研究院・院長) /中国/ '19.9.6~9.11
- 郭 明(遼寧省文物考古研究院・副研究館員) /中国/ '19.9.6~9.11
- 柏 芸萌(遼寧省文物考古研究院・副研究館員) /中国/ '19.9.6~9.11
- 陳 建立(北京大学考古文博学院・教授) /中国/ '19.9.6~9.11
- カズイーム・アブドゥラエフ(イスタンブール大学芸術学部・上級研究員) /トルコ/ '19.10.26~11.3
- 周 振宇(中国社会科学院考古研究所・副研究員) /中国/ '19.11.1~12.1
- 唐 錦琼(中国社会科学院考古研究所・副研究員) /中国/ '19.11.1~12.1
- 魏 興濤(河南省文物考古研究院・研究

員) /中国/ '19.12.16~12.20

- 趙 文軍(河南省文物考古研究院・研究員) /中国/ '19.12.16~12.20
- 慕 俊紅(河南省文物考古研究院・副主任) /中国/ '19.12.16~12.20
- 閆 海濤(河南省文物考古研究院・助理館員) /中国/ '19.12.16~12.20
- 郭 子樺(河南省文物局・副主任科員) /中国/ '19.12.16~12.20
- 英国/ヨーク大学/ '20.1.5~4.1
- ONGGAR AKAN(カザフスタン国立博物館民族遺産研究所・所長) /カザフスタン/ '20.1.17~1.26
- ASSYLBEKOV KALIBEK(カザフスタン国立博物館民族遺産研究所・上級研究員) /カザフスタン/ '20.1.17~1.26
- KAIRMAGAMBETOV ARKHAT(カザフスタン国立博物館考古資料応急処置室・室長) /カザフスタン/ '20.1.17~1.26
- RAKHIMZHANOVA SAULE(カザフスタン国立博物館考古資料応急処置室・研究員) /カザフスタン/ '20.1.17~1.26
- DOSSAYEVA DANA(カザフスタン国立博物館保存修復室・室長) /カザフスタン/ '20.1.17~1.26
- ALIMGAZYEVA ZHANSAYA(カザフスタン国立博物館保存修復室・修復家) /カザフスタン/ '20.1.17~1.26
- ヴィリニウス大学/リトアニア/ '20.1.22~1.27
- マックス・プランク人類史科学研究所/ドイツ/ '20.1.22~1.27
- Paula Dupuy(ナザルバエフ大学文化人類学(考古学)科・准教授) /カザフスタン/ '20.1.22~1.27
- 韓 志仙(国立文化財研究所・学藝研究士) /韓国/ '20.2.3~2.7
- 鄭 修鉦(国立完州文化財研究所・学藝研究士) /韓国/ '20.2.3~2.7
- 姜 素英(国立文化財研究所・学藝研究士) /韓国/ '20.2.3~2.7

※EEA加盟国からの招へい者の氏名・役職はEU一般データ保護規則により掲載していません。

奈文研研究者の海外渡航一覧

- 丹羽 崇史: アメリカ/ '19.4.6~4.16/第84回アメリカ考古学会(SAA 84th Annual Meeting)での発表、関連資料の調査/科学研究費
- 杉山 洋: カンボジア/ '19.4.7~4.11/西トップ遺跡の調査と修復/助成金
- 芝 康次郎: 韓国/ '19.4.17~4.20/科学

研究費による出土遺物の調査／科学研究費
 ●杉山 洋：カンボジア／'19.4.22～4.26／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金
 ●金田 明大：ポーランド／'19.4.22～4.29／CAA 2019 in クラクフへの参加／運営費交付金
 ●山口 欧志：ポーランド／'19.4.22～4.29／CAA 2019 in クラクフへの参加／運営費交付金
 ●高田 祐一：ポーランド／'19.4.22～4.29／アリアドネブラスに関する協議およびCAAでの発表／科学研究費
 ●丹羽 崇史：韓国／'19.4.27～5.5／韓国出土施釉陶器・中国陶磁の調査／助成金
 ●佐藤 由似：カンボジア／'19.5.1～5.11／ポスト・アンコール期の調査／科学研究費
 ●清野 陽一：韓国／'19.5.15～6.30／国立慶州文化財研究所との発掘交流／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
 ●中村 一郎：カンボジア／'19.5.19～5.24／ACCUユネスコ・アジア文化センター主催ワークショップ事前調査／先方負担
 ●佐藤 由似：カンボジア／'19.5.19～6.2／ポスト・アンコール期の調査／科学研究費
 ●杉山 洋：カンボジア／'19.5.20～5.24／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金
 ●大林 潤：カンボジア／'19.5.20～5.24／西トップ遺跡およびアンコール地域内遺跡の建築調査／科学研究費
 ●脇谷 草一郎：中国／'19.5.24～5.26／故宮博物院文華殿の劣化状態調査に参加／運営費交付金
 ●内田 和伸：韓国／'19.5.26～5.30／韓国国立文化財研究所との共同研究／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
 ●中島 義晴：韓国／'19.5.26～5.30／韓国国立文化財研究所との共同研究／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
 ●鈴木 智大：韓国／'19.5.31～6.2／揚州市・松巖寺シンポジウムへの出席／先方負担
 ●国武 貞克：タジキスタン／'19.6.4～6.29／発掘調査／科学研究費
 ●田村 朋美：ウズベキスタン／'19.6.9～6.13／出土ガラスの調査／科学研究費
 ●影山 悦子：ウズベキスタン／'19.6.9～6.15／ファヤズテパ遺跡出土壁面の調査、修復／助成金
 ●杉山 洋：カンボジア／'19.6.10～6.14／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金
 ●庄田 慎矢：カンボジア／'19.6.10～6.16／アンコール国際調整委員会出席、西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金
 ●佐藤 由似：カンボジア・タイ／'19.6.10～6.22／西トップ遺跡の調査、SPAFA学会／運営費交付金
 ●高妻 洋成：中国／'19.6.14～6.16／The

3rd International Symposium on Architectural Heritage Protection Technology.／先方負担
 ●清野 孝之：フランス／'19.6.16～6.23／ユネスコ水中文化遺産国際会議およびユネスコ水中文化遺産条約締約国会議への出席／文化庁受託
 ●田村 朋美：タイ／'19.6.17～6.20／国際会議（3rd SEMEO SPAFA International Conference on Southeast Asian Archaeology）に出席、研究発表／科学研究費
 ●杉山 洋：カンボジア／'19.7.1～7.5／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金
 ●庄田 慎矢：韓国／'19.7.2～7.6／日韓共同研究にかかる調査研究／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
 ●国武 貞克：カザフスタン／'19.7.9～8.7／発掘調査／科学研究費
 ●杉山 洋：カンボジア／'19.7.15～7.19／西トップ遺跡の調査と修復／助成金
 ●加藤 真二：中国／'19.7.20～7.27／河北省陽原での旧石器遺跡調査／科学研究費分担金
 ●山藤 正敏：イスラエル／'19.7.23～8.9／テル・エラニ遺跡における発掘調査および同遺跡出土土器の共同研究／渡航費：委託費、滞在費：先方負担
 ●箱崎 和久：中国／'19.7.25～8.3／古代・中世寺院建築に関する資料収集／科学研究費
 ●庄田 慎矢：オーストラリア／'19.8.1～8.9／Workshop "Archaeologies of Tradition"、研究打合せ／渡航費：先方負担、滞在費：先方負担、科学研究費
 ●佐藤 由似：カンボジア／'19.8.8～8.21／西トップ遺跡の調査／助成金
 ●丹羽 崇史：中国／'19.8.23～8.26／アジア铸造技術史学会2019西安大会への参加・発表／科学研究費
 ●国武 貞克：カザフスタン／'19.8.23～9.21／発掘調査／科学研究費
 ●杉山 洋：カンボジア／'19.8.25～9.1／西トップ遺跡の調査と修復／助成金
 ●高妻 洋成：韓国／'19.8.27～9.1／東アジア文化遺産保存シンポジウム／運営費交付金
 ●金田 明大：アイルランド／'19.8.27～9.3／ICAP2019への参加／科学研究費
 ●田村 朋美：韓国／'19.8.28～9.2／2019大田東アジア文化遺産保存国際シンポジウムに参加および韓国出土ガラス玉の調査／科学研究費
 ●柳 成煜：韓国／'19.8.28～9.2／東アジア文化遺産保存シンポジウム参加および資料調査／運営費交付金
 ●柳田 明進：スイス／'19.8.31～9.9／ICOM-CC METAL2019における学術発表および情報交換／運営費交付金
 ●渡邊 晃宏：中国／'19.9.5～9.8／首屆中

日韓出土簡牘研究国際論壇への参加ほか／科学研究費
 ●畑野 吉則：中国／'19.9.5～9.9／首屆中日韓出土簡牘研究国際論壇への参加／科学研究費
 ●馬場 基：中国／'19.9.6～9.9／首屆中日韓出土簡牘研究国際論壇への参加／科学研究費
 ●浦 蓉子：中国／'19.9.10～9.16／中国良渚遺跡の木製品調査／他機関科学研究費
 ●李 暉：中国／'19.9.11～9.16／中国浙江省寧波地区大工道具調査実施／科学研究費
 ●加藤 真二：カザフスタン／'19.9.14～9.20／研修事業の事前打合せ／受託
 ●庄田 慎矢：カザフスタン／'19.9.14～9.20／研修事業の事前打合せ／受託
 ●影山 悦子：カザフスタン／'19.9.14～9.20／研修事業の事前打合せ／受託
 ●田村 朋美：カザフスタン／'19.9.14～9.20／研修事業の事前打合せ／受託
 ●佐藤 由似：カンボジア／'19.9.18～10.1／西トップ遺跡の調査／助成金
 ●島田 敏男：カンボジア／'19.9.19～9.23／西トップ遺跡およびアンコール地域内遺跡の建築調査／科学研究費
 ●大林 潤：カンボジア／'19.9.19～9.24／西トップ遺跡およびアンコール地域内遺跡の建築調査／科学研究費
 ●杉山 洋：カンボジア／'19.9.19～9.25／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金
 ●小田 裕樹：中国／'19.9.20～9.23／東北アジア古代都城国際検討会での研究発表／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
 ●山藤 正敏：キルギス／'19.9.29～10.13／チューン渓谷西部の考古学調査／科学研究費
 ●国武 貞克：タジキスタン／'19.10.8～11.9／タジキスタンにおける発掘調査／科学研究費
 ●石田 由紀子：中国／'19.10.8～11.15／中国社会科学院考古研究所との協定書にもとづく日中學術交流への参加／先方負担
 ●庄田 慎矢：ポルトガル／'19.10.9～10.18／打合せ、Wenner-Gren基金シンポジウム"Culture of Fermentation"／渡航費：先方負担、滞在費：先方負担、運営費交付金
 ●廣瀬 覚：韓国／'19.10.10～10.14／国立歴史民俗博物館共同研究「古墳時代・三国時代の日韓関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」第2回への参加／他機関負担
 ●山口 欧志：インドネシア／'19.10.15～10.27／ボロブドゥール寺院遺跡の三次元計測等／他機関負担
 ●丹羽 崇史：中国／'19.10.17～10.22／第二屆世界古都論壇暨紀念二里頭遺址科学発掘60周年學術研討会への参加・発表、資

料調査／科学研究費

- 李 暉：中国／'19.10.19～10.22／古代東アジアの重層建築に関する学会議へ出席／科学研究費分担金
- 杉山 洋：カンボジア／'19.10.21～10.28／西トップ遺跡の調査と修復／助成金
- 佐藤 由似：オーストラリア／'19.10.22～10.28／フリンダース大学ワークショップでの発表、遺物調査／先方負担
- 田村 朋美：ウズベキスタン／'19.10.26～11.4／ウズベキスタンにおける釉薬製造工程の調査および出土ガラスの科学分析／科学研究費分担金
- 庄田 慎矢：中国／'19.10.27～10.30／研究発表、打合せ／科学研究費
- 佐藤 由似：カンボジア／'19.11.2～11.7／西トップ遺跡の調査／運営費交付金
- 渡邊 晃宏：韓国／'19.11.8～11.10／韓国木簡学会・成均館大学東アジア学術院主催2019年国際学会議「出土資料からみた東アジアの数量詞と量制」への参加と報告／先方負担
- 田村 朋美：中国／'19.11.8～11.10／ワークショップ「Silk Roads: archaeology, museums and heritage science」に参加、講義／先方負担
- 島田 敏男：ベトナム／'19.11.9～11.13／ベトナム国ティエンザン省知事表彰出席／運営費交付金
- 福嶋 啓人：ベトナム／'19.11.9～11.13／ベトナム国ティエンザン省知事表彰出席／運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア／'19.11.10～11.15／西トップ遺跡の調査と修復／助成金
- 小池 伸彦：中国／'19.11.11～11.18／遼寧省文物考古研究院との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 廣瀬 覚：中国／'19.11.11～11.18／遼寧省文物考古研究院との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 田村 朋美：中国／'19.11.11～11.18／遼寧省文物考古研究院との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 栗山 雅夫：中国／'19.11.11～11.18／遼寧省文物考古研究院との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 松永 悦枝：中国／'19.11.11～11.18／遼寧省文物考古研究院との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 大澤 正吾：中国／'19.11.11～11.18／遼寧省文物考古研究院との国際共同研究「三

燕文化出土遺物の研究」／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

- 丹羽 崇史：中国／'19.11.12～11.14／講演・学会発表／科学研究費
- 加藤 真二：中国／'19.11.13～11.18／中国社会科学院考古研究所への訪問・発掘現場の視察／運営費交付金
- 松村 恵司：中国／'19.11.14～11.18／中国社会科学院考古研究所への訪問・発掘現場の視察／運営費交付金
- 玉田 芳英：中国／'19.11.14～11.19／中国社会科学院考古研究所への訪問・発掘現場の視察／他機関負担
- 箱崎 和久：中国／'19.11.15～11.18／中国科学技術学会委員会における講演／先方負担
- 中村 一郎：カンボジア／'19.11.16～11.21／ACCUユネスコ・アジア文化センター主催ワークショップ／先方負担
- 影山 悦子：カザフスタン／'19.11.16～11.25／現地ワークショップの開催／受託
- 庄田 慎矢：カザフスタン／'19.11.18～11.25／現地ワークショップの開催／受託
- 佐藤 由似：カンボジア／'19.11.19～11.25／ACCU文化遺産ワークショップ／先方負担
- 丹羽 崇史：韓国／'19.11.23～11.27／資料調査／科学研究費
- 田村 朋美：韓国／'19.11.26～11.28／International Symposium of 'World of Ancient Glass'に参加、研究発表／先方負担
- 石橋 茂登：韓国／'19.11.26～11.29／古墳採取資料等の展示活用事例調査／受託
- 中田 愛乃：韓国／'19.11.26～11.29／古墳採取資料等の展示活用事例調査／受託
- 加藤 真二：中国／'19.11.28～12.5／資料調査並びにInternational Symposium on Paleoanthropology in Commemoration of the 90th Anniversary of the Discovery of the First Skullcap of Peking Man への出席、発表／科学研究費分担金
- 佐藤 由似：カンボジア／'19.11.29～12.13／西トップ遺跡の調査、式典、国際会議／運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア／'19.11.30～12.6／西トップ遺跡の調査と修復／助成金
- 松村 恵司：カンボジア／'19.12.1～12.4／25周年記念式典の出席、準備、運営／運営費交付金
- 影山 悦子：カンボジア／'19.12.1～12.4／25周年記念式典の準備、運営／運営費交付金
- 庄田 慎矢：カンボジア／'19.12.1～12.5／25周年記念式典の準備、運営／運営費交付金
- 脇谷 草一郎：中国／'19.12.1～12.7／2019 International Symposium on

Dazu Studies and the 20th Anniversary Celebration of the Dazu Rock Carvings inscribed into the World Heritage List にて研究発表／運営費交付金

- 大澤 正吾：アメリカ／'19.12.3～12.8／「北米・欧州ミュージアム日本美術専門家連携交流事業」に係る在外日本美術作品の調査（日本考古（原史）の埴輪・金属製品・土器等）／他機関負担
- 石橋 茂登：英国／'19.12.11～12.18／古墳採取資料等の展示活用事例調査／受託
- 萩山 琴美：英国／'19.12.11～12.18／古墳採取資料等の展示活用事例調査／受託
- 杉山 洋：カンボジア／'19.12.13～12.19／西トップ遺跡の調査と修復／助成金
- 庄田 慎矢：中国／'19.12.15～12.17／研究発表／先方負担
- 佐藤 由似：カンボジア／'19.12.22～12.31／西トップ遺跡の調査／運営費交付金
- 脇谷 草一郎：トルコ／'19.12.24～12.29／ハギヤ・ソフィア大聖堂ほかにおける塩害調査／科学研究費分担金
- 浦 蓉子：中国／'19.12.25～12.28／京都大学生存圏研究所アジアリサーチノード国際シンポジウムへの参加／他機関負担
- 田村 朋美：中国／'20.1.11～1.13／中国出土ガラス製遺物の調査／科学研究費分担金
- 李 暉：中国／'20.1.11～1.14／シンポジウム講演および古建築調査／科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア・タイ／'20.1.14～1.21／西トップ遺跡の調査と修復／助成金
- 山口 欧志：インドネシア／'20.1.20～1.24／ボロブドゥール遺跡の三次元計測等／他機関負担
- 佐藤 由似：カンボジア／'20.1.30～2.13／ポスト・アンコール期の調査／先方負担
- 西田 紀子：韓国／'20.1.31～2.4／古代日韓交流関係の資料調査／助成金
- 小沼 美結：韓国／'20.1.31～2.4／古代日韓交流関係の資料調査／助成金
- 山藤 正敏：イスラエル／'20.2.8～2.21／イスラエル国テル・エラニ遺跡出土時の共同研究／渡航費：二国間交流事業協同研究・セミナー委託費
滞在費：先方負担
- 飯田 ゆりあ：ウズベキスタン／'20.2.9～2.15／ファヤズテバ遺跡出土壁画の撮影／科学研究費
- 影山 悦子：ウズベキスタン／'20.2.9～2.15／ファヤズテバ遺跡出土壁画の調査、修復／助成金
- 芝 康次郎：韓国／'20.2.11～2.15／出土遺物の調査／科学研究費
- 吉田 万智：台湾／'20.2.12～2.14／土層やはぎとり等の資料調査／受託
- 小沼 美結：台湾／'20.2.12～2.15／古墳

採取資料等の展示活用事例調査／受託

●廣瀬 覚：韓国／'20.2.17～2.21／日韓共同研究にかかる調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●高田 祐一：韓国／'20.2.18～2.21／日韓共同研究にかかる調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●石橋 茂登：韓国／'20.2.23～2.26／古代日韓関係に関わる考古資料調査／助成金

●庄田 慎矢：韓国／'20.2.23～2.26／協議、資料調査／渡航費：先方負担、滞在費：先方負担、科学研究費分担金

●杉山 洋：カンボジア、タイ／'20.2.23～2.28／西トップ遺跡の調査と修復／科学研究費分担金

●佐藤 由似：カンボジア／'20.2.24～2.29／アンコール遺跡群現地調査派遣／先方負担

●玉田 芳英：イタリア／'20.2.24～3.1／古墳壁画の調査研究に関わる事例調査／受託

●栗山 雅夫：イタリア／'20.2.24～3.1／古墳壁画の調査研究に関わる事例調査／受託

●中田 愛乃：イタリア／'20.2.24～3.1／古墳壁画の調査研究に関わる事例調査／受託

公開講演会

第124回公開講演会

2019年6月15日

◆前川 歩 「第一次大極殿院南門の復原」

現在工事が進められている、平城宮第一次大極殿院南門について、2010年度以降その復原をどのようにおこなってきたのか報告した。具体的には、これまでの復原研究（1981年～2002年）のレビュー、発掘調査（1973年、2005年）の成果をまず述べ、南門の規模（単層門／重層門）と柱配置の検討、重層形式（二重門／楼門）の検討、屋根形状（入母屋／寄棟）の検討、組物形式の検討、柱間装置の検討の順に、復原プロセスについて報告した。

◆松田 和貴 「出土木製品の恒久的な保存と一時的な保管」

遺跡から出土する含水状態の木製品の多くは、埋蔵中の劣化により脆弱化している。これらは、乾燥によって著しい収縮・変形を生じることから、安定化のための保存処理に着手されるまでの間、水中に漬ける等して一時的に保管される。一方、出土木製品の保存処理の効率には限界があるため、事前の「一時的」な保管も長期化する例が多い。しかしながら、このとき木製品の劣化は緩慢ながらも確実に進行する。出土木製品をより良好な状態で恒久的に保存するには、保存処理だけでなく一時保管環

境における劣化抑制も重要である。本発表では、出土木製品の保存に関する研究について、一時保管にも注目しながら紹介した。

◆村田 泰輔 「防災・減災に向けた考古学の新たな挑戦～地域災害履歴を発掘調査から知る」

奈文研が2014年度から取り組んできた、「考古資料および文献史料からみた過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベースの構築・公開」および「考古・文献資料からみた歴史災害情報の収集とデータベース構築・公開ならびにその地質考古学的解析」事業について紹介した。近年、南海トラフ地震や桜島大規模噴火をはじめ、多くの巨大災害の発生が危ぶまれている。そんな中、奈文研は国を挙げての防災・減災事業である「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画（建議）」に参画し、考古学の調査成果から過去の災害痕跡の情報を集成し、「いつ」「どこで」「どのような」災害が発生したかが検索できる「歴史災害痕跡データベース」の構築を進めている。このデータベースは地域の災害履歴が判るだけでなく、過去の巨大地震や火山噴火による被災メカニズムの解明の足掛かりとなることが期待される。

第11回東京講演会

2019年10月5日

◆内田 和伸 「平城宮の地はどうして選ばれたのか？—平城遷都の詔における四禽と三山—」

平城遷都の詔における「平城の地は四禽図に叶い、三山鎮をなし」としている部分は、平城遷都の立地的理由である。その四禽や三山が具体的に何にあたるか通説を紹介した上で私案を示した。「四禽図に叶い」とは天空の四神に対応する地形、即ち山々の数が、河図で五行思想に基づき各方位に配当される数字に一致することとした。三山については3案を示した。第1案は延喜式から平城京内外の天皇陵等で祭祠の対象となっていたもので、開化天皇陵、神功皇后陵、垂仁天皇陵とした。第2案は神仙が意識されてきた葛城山、生駒山、吉野山。第3案は一直線に並ぶ天智天皇陵、藤原宮大極殿、天武持統陵を藤原京の三山とみて、その見立てが平城京へも引き継がれたと見たものである。

◆今井 晃樹 「平城宮のモデルは唐の都長安城か？」

平城京は唐の都、長安城を参考に造営されたとの指摘は以前からあった。今回の講

演では平城宮と唐長安城における宮城の比較に重点をおき、その共通点を具体的に示すこととした。

平城宮は唐長安城にあった3つの宮城のうち、大明宮との共通点が多いことをあきらかにした。大明宮の正殿である含元殿の基壇・大台の構造は平城宮第一次大極殿の基壇・土台と類似する。また、含元殿前の内庭規模が第一次大極殿院と中央区朝堂院をあわせた内庭部の面積と近似している。いずれの状況も長安城、平城京において前後の時期に類例がなく特異であることから、平城宮の中核部は大明宮の中核部を参考に造営されたと結論した。

さらに、平城京の北に広がる松林苑にも注目し、その規模や形状が大明宮北半の太液池を中心とする苑地区と類似することを指摘した。平城宮および松林苑は大明宮全体の構造を参照しながら設計されたのではないか、という試案を提示した。

◆桑田 訓也 「平城宮はどのように作られたのか？」

主に文献史学の立場から、はじめに平城宮の名前の由来について簡単に触れ、次に平城宮の形の由来と完成時期という二つのトピックについてとりあげた。

平城宮が東に張り出す特異な形をしている理由は、藤原宮で一つだった中核区画が平城宮で二つに増え、その分の面積を確保したためと考えられていること、平城宮は710年の遷都時には未完成であり、東区や東張り出し部の造営が比較的進んでいたのに対し、中央区や築地大垣の造営は遅れる状況が発掘調査によってあきらかになってきたこと等を紹介した。

◆小田 裕樹 「平城宮の東院とはどういう施設か？」

平城宮東院地区の発掘調査成果にもとづいて、当該地区に存在した施設についてあきらかになってきたことを述べた。初めに文献資料から東院地区に存在したとみられる施設について概観した後、奈文研がおこなってきた東院地区の発掘調査成果について紹介した。

そして奈良時代末（宝亀年間）にあたる東院6期の遺構群を整理し、中核施設について未調査地の遺存地割もふまえて建物配置の復元案を提示した。さらに、この施設が光仁天皇の「楊梅宮」とみられること、古代宮都中核施設の変遷を考える上で、重要な知見であることを論じた。

◆神野 恵「施釉瓦埴・陶器の出土は何を示すか？」

平城宮における施釉瓦埴・奈良三彩の出土分布が、第一次大極殿院地区（称徳朝の西宮）や、内裏東方、東院地区に偏ることを述べた。これらの地域からは、「供養」や「仏」、「僧」等と書かれた墨書土器等仏教に関連する遺物も目立つことから、施釉瓦埴や奈良三彩が仏教関連の行事や施設にともなうものである可能性を指摘した。文献資料には、平城宮大極殿で御齋会等の仏事がおこなわれたと記されており、「内道場」といった常設的な仏教施設があったことも指摘されている。本報告では、とくに東院地区において施釉埴の出土が目立ち、常設的な仏教施設が存在が想定されることを述べた。

◆福嶋 啓人「平城宮で即位した天皇の大嘗宮は？」

新天皇の即位に際し、即位儀礼の一環として挙行される大嘗祭について、発掘調査成果をもとに、平城宮跡で見つかった大嘗宮の遺構について概説した。平城宮跡では奈良時代の6時期分の大嘗宮遺構を発見しており、各大嘗宮の位置と規模、建物の配置計画や各建物の規模について、平安時代の儀式書である『儀式』や既往研究だけでなく、私論も交えながら、奈良時代から平安時代初頭までの変遷過程を論じた。加えて、各大嘗宮遺構に比定される天皇についても論じた。最後に古代の大嘗宮の様相について、未だ残された謎についてもまとめた。

◆パネルディスカッション「まだまだある平城宮の謎」 (コーディネーター：渡辺 晃宏)

奈文研が平城宮跡の継続的な発掘調査をおこなうようになってから、2019年で60年を迎えた。この間発掘調査を終えたのはまた38%余りで、まだ未解明の部分が多く残されている。

そこで、今後平城宮跡のどの部分を調査したいか、各報告者に3カ所ずつ指摘してもらった。そして、候補に挙がった西南苑池、松林苑・宮北方、東院と東面宮城門、中央区朝堂院、官衙地区、宮外の官関連施設の6点について、残された謎について詳しく紹介し、今後の平城宮跡の発掘調査の方向性について、議論を深めた。

なお、講演会の記録集『奈良の都、平城宮の謎を探る』を刊行した。

第125回公開講演会

2019年11月9日

◆松永 悦枝「土でつくったささげもの—土製模造品からみた古墳祭祀の変遷—」

古墳から出土する多様な遺物のなかには、動物や食べ物等を土でかたどった土製模造品がある。かつては祭祀遺跡からの出土が主であったため、カミ祭りの道具の一種として、石製模造品との関係のなかで語られる傾向にあったが、近年では古墳出土資料の増加により、古墳においては、死者への食物供献儀礼を表すものとして、その性格が指摘されてきた。本発表では、古墳出土資料に注目しながら、多様な形状を呈する土製模造品を紹介し、形態的特徴からその性格を再整理した。また、同時期の祭祀遺跡の資料と比較することで、古墳出土資料との相違点を指摘した。そして形態、出土位置、共伴する遺物について時期別に整理し、土製模造品からみた古墳祭祀の特徴と変遷について概観した。

◆山口 欧志「デジタル技術で結ぶ人と未来と文化財」

文化財を未来に伝えるためには、文化財の調査研究をはじめ保存保護、修復、活用の取り組みを人と文化財のつながりを中心に据えながら持続的に実施することが大切であり、ICTはその有効な道具であると述べた。

事例としてデジタル技術を用いた三次元記録の取り組みを取り上げ、1cmに満たない僅かな痕跡から遺跡の周辺地形といった大きなものまで誰もが導入可能な方法で記録できることを示した。またVR等を用いた文化財の共体験展示や、学校教育で導入が進むMinecraftでの文化財のデータ活用を述べた。そして、このような取り組みが文化財情報の共有を促進し、文化財の歴史的・文化的価値に共感する契機をもち、文化財を未来に継承する力に寄与する可能性を指摘した。

◆内田 和伸「奈文研による今年度の平城宮跡の活用について」

遺跡整備研究室を中心にして奈文研でおこなっている平城宮跡活用について紹介した。平城宮跡出土木簡が契機となり、兵庫県養父市八鹿町小佐地区で赤米栽培がはじまり、地元の小学生が赤米を作り持参する体験学習を受け入れた。遺跡の本来の脈絡に因む現代的活用として注目している。本年は令和元年であることから、即位関連遺構の活用を図った。一つは第一次大極殿前で近年認識された幢旗遺構であり、ARを作成し、大極殿を背景に即位時の設えを

体感する体験会を講演会の後で実施した。もう一つは東区朝堂院で表示されている大嘗宮に関連するリーフレットを作成したことであった。

研究集会

◆中央アジア旧石器研究集会（第3回）

2019年11月21日

奈良文化財研究所で開催した中央アジアにおける近年の旧石器調査成果を総括した研究集会。第3回は、中国泥河湾遺跡群西白馬宮遺跡（周振宇：中国社会科学院考古研究所副研究員）、中国北部のEUP期石器群の総括検討報告（加藤真二：奈文研）、タジキスタンのフジ遺跡（国武貞克：奈文研）、日本九州島におけるEUP期石器群の総括検討報告（芝康次郎：奈文研）の報告があった。討論では、ユーラシア東半部における後期旧石器文化の開始とその後の展開について、中型石刃石器群と小石刃石器群の関わりを軸にすえて議論した。本研究集会は、文部科学省科学研究費補助金19H1354（研究代表者：国武）による成果の一部である。（国武 貞克）

◆古代官衙・集落研究会（第23回）

2019年12月13日～14日

2019年度は「灯明皿と官衙・集落・寺院」と題して研究集会を開催した。

研究報告は、神野恵「古代都城の灯火器」、渡邊誠氏（香川県教育委員会）「国府・寺院における灯明皿」、富永樹之氏（神奈川県教育委員会）「古代相模国における出土遺跡から見た灯明皿」、桑田訓也「文献からみた灯明皿」、梶原勝氏（江戸遺跡研究会）「近世灯明皿の変遷から見る生活様式の変化」の計5本である。発表終了後、尾野善裕の司会による総合討議をおこない、灯明皿にみられる痕跡や使用場面の復元、各遺跡の性格と出土灯明皿との関係や歴史的特質に関する活発な討議が交わされた。

参加者は、地方公共団体・大学関係者等計115名で、アンケートでは97%が有意義であったとの回答が寄せられた。なお、今回の研究集会の研究報告を2020年度に刊行する予定である。

このほか、2018年度に実施した研究集会の研究報告『官衙・集落と大甕』を2019年12月に刊行した。（小田 裕樹）

◆古代瓦研究会（第20回）

2020年2月1日～2日

今回は、「鴟尾・鬼瓦の展開 I—鴟尾—」

をテーマとして、奈文研平城宮跡資料館講堂においてシンポジウムを開催した。屋根の棟端を飾る瓦である鴟尾、鬼瓦のうち、今年度は鴟尾を取り扱った。参加者は地方公共団体・大学・研究機関関係者等のべ251名である。1日は、道上祥武が奈良、熊谷舞子氏（京都市文化市民局）が京都・滋賀、丸山香代氏（寝屋川市教育委員会）が大阪・和歌山、垣内拓郎氏（兵庫県まちづくり技術センター）が兵庫、香川将慶氏（高松市埋蔵文化財センター）が山陽・四国地方、2日は、武田寛生氏（静岡県埋蔵文化財センター）が東海地方、久保穰二郎氏（元鳥取県埋蔵文化財センター）が山陰地方、比嘉えりか氏（福岡市経済観光局）が九州地方、洪バルグム氏（韓国国立文化財研究所）が韓国の状況を報告し、合わせて資料観察会をおこなった。また、佐川正敏氏（東北学院大学）が東北地方、出浦崇氏（伊勢崎市教育委員会）、皆川貴之氏（茨城県教育財団）が関東地方、熊谷葉月氏（石川県埋蔵文化財センター）が北陸地方、三好清超氏（飛騨市教育委員会）、小林新平氏（岐阜県文化財保護センター）が中部地方の状況を紙上で報告した。2日午後には、今井晃樹の司会により総合討議をおこない、各地における鴟尾の製作技法、文様、年代観、系譜等とそれらの背景について活発な議論が交わされた。

なお、今回のシンポジウムの成果は、2021年度に刊行する予定である。

（清野 孝之）

科学研究費等

◆木簡等の研究資源オープンデータ化を通じた参加誘発型研究スキーム確立による知の展開

代表者・馬場 基 基盤研究 (S) 継続

本研究は、「木簡」を主たる対象として、参加誘発型スキームを確立し、そこで集積した知を用いて、研究を飛躍的に向上させることを目指すものである。

2019年度は、歴史的文字の国際的共通検索実現のため、奈文研・東京大学史料編纂所・国文学研究資料館・国立国語研究所・台湾中央研究院歴史語言研究所で「IIFにもとづく歴史的な文字研究資源情報と公開の指針」およびこれにもとづいたデータ仕様を策定した。この仕様にもとづくデータ蓄積を進めるとともに、ポータルサイト「史的な文字データベース連携検索システム」の実証実験版を開発して、連携検索の一部実現・公開を開始するとともに、問題点の抽出に着手した。

このほか、文字に関する知識の集積作業を実施した。

◆発掘遺構による古代寺院建築史の構築

代表者・箱崎 和久 基盤研究 (A) 継続

発掘調査で検出した古代寺院の遺構を集成し、それを分析するというオーソドックスな手法で古代建築史を見直そうというのが研究の大きな目的である。それとともに、近年の研究によって、地方寺院間や官衙との関係から、瓦の生産体制や流通についてもあきらかになってきている。発掘遺構の分析とともに、瓦研究の成果を総合して古代寺院建築史を検討したいと考えている。

2019年度は、発掘遺構の集成データを整理し、資料集の作成するため、掲載方法等を検討し、図版データを調整作業を進めた。瓦データについても収集作業をさらに進め、遺構とのリンクを図って資料集への掲載を進めている。資料集は冊子の形態での出版を目指して今後も作業を進める計画である。

◆平城宮・京跡出土木簡とその歴史環境のグローバル資源化

代表者・渡辺 晃宏 基盤研究 (A) 継続

東アジア木簡学の構築に資すべく、発掘情報、文献資料、地理情報とのリンクにより、日本最大の木簡包蔵地平城宮・京跡の木簡情報の共有資源化を図るものである。

2019年度は4年計画の2年目で、(1)平城宮・京跡の発掘調査成果（遺構、および共伴遺物）を木簡データベース「木簡庫」にリンクさせるシステムの構築、(2)『平城京編年史料集成（稿）』作成に向けた資料収集、の2点を中心に研究を実施した。

このうち(1)では、平城宮・京跡を対象にWebGISシステムのβ版を開発した(Heijo Heritagemap (仮称))。国土地理院の1/25000地形図をベースに、既発掘区と大・中・小地区のグリッドを表示し、小地区ごとに出土遺物を一覧できる。また、URLにより「木簡庫」で木簡の詳細を確認できる。将来は、木簡以外の遺物や遺構の情報が搭載可能な汎用性も備えている。

ベースには、国土地理院提供の各種地図・空中写真を始め、奈文研撮影の航空写真も表示できる。今後奈文研作成の奈良盆地の1/1000地形図も搭載する予定である。

◆木簡の年輪年代学：同一材推定による再積読と荷札木簡を用いた地域標準年輪曲線の構築

代表者・星野 安治 基盤研究 (B) 継続

木簡を対象とした年輪年代学的な同一材推定および荷札木簡を用いた地域標準年輪曲線を構築することにより、木簡から考古資料としての新たな価値を引き出し、考古学・古代史学・年輪年代学が融合した研究を推進する。2019年度は、平城宮・京跡から出土した参河三嶋贅荷札について検討を実施した結果、同一遺構出土で、記載内容が一致または類似する荷札に、同一材由来と考えられる組を見出した。このことは、それぞれ組となる荷札が製作された同時性の高さを示すものといえる。また、これまでの研究成果の一部が、岩波書店から出版された『木簡 古代からの便り』に掲載された。

◆南都の未整理文書聖教にもとづく寺社とその周辺社会の調査研究

代表者・吉川 聡 基盤研究 (B) 継続

2年目である2019年度は、新修東大寺文書聖教の第86函～第97函の調査や、第86函・98函等の写真撮影を実施した。また明治初年の日記の一部を翻刻した。

さらに、東大寺中性院が所蔵する襖・屏風の張り下り文書について、糊を剥がし調査する作業と、そこから見いだした文書の検討を、研究分担者の横内裕人氏を中心となって実施した。またその史料の一部を雑誌『南都仏教』第101号に公表した。

加えて、個人所蔵の興福寺関係資料について、悉皆的な整理・調査を実施した。また、奈良の旧家の個人蔵の資料について、研究協力者の協力の下で、中世文書の調査・積文検討作業をおこなった。

◆松帆銅鐸発見を契機とする銅鐸論の再構築

代表者・難波 洋三 基盤研究 (B) 継続

本年度は、南あわじ市教育委員会が刊行する松帆銅鐸報告書の作成に協力し、銅鐸の観察記録と科学分析結果の報文の作成、銅鐸の範傷と鑄造欠陥の観察と図化、実測図のチェックと修正等をおこなった。また、銅鏡や青銅器の鉛同位体比分析とICP分析も前年度より継続して実施した。中でも興味深いのは、東奈良遺跡出土小銅鐸の分析結果で、外縁付鈕1式末より古い銅鐸と同じ朝鮮半島系遺物タイプの鉛を含むが、錫約7%、鉛約0.8%と、これらの古式の銅鐸とはまったく異なる組成の青銅製であることが判明した。銅鐸の祖型とするか、銅鐸成立以後の製作とするか、議論のあるこの小銅鐸の位置付けを明確にするた

めの重要な情報を得ることができたと考える。

◆和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究 代表者・松村 恵司 基盤研究 (B) 継続

本年度も当研究所の「地方官衙関係遺跡データベース」を利用して官衙関連遺跡の分布図を作成し、和同開珎出土遺跡分布図と比較対照する作業を継続した。また、『日本古代貨幣関係木簡集成』の刊行に向けた編集作業をおこなった。平城宮跡から出土した12点の「一千文貫木簡」を分析した結果、これまで実体が不明であった田原鑄銭司が、新銭を進上する際に、貫緡に整えた責任者名を記した木簡である可能性が高まった。前年度に実施した研究集会「和同開珎の生産と流通をめぐる諸問題」の記録集の作成に向けた編集作業をおこない、年度末に研究成果報告書『和同開珎の生産と流通 (二)』(A 4 版、179 頁) を刊行した。

◆中央アジア 天山—パミール地域における後期旧石器文化成立過程の研究

代表者・国武 貞克 基盤研究 (B) 新規

中央アジアにおける後期旧石器文化の成立過程を究明するために、野外調査によるオリジナルな新資料を獲得することを第一の目的としている。採択1年目の2019年度は、2017年に新規に発見したカザフスタン南部のピリョックバスタウ・ブラック1遺跡の第2次発掘調査を実施した。湧水周辺の堆積層中より、上層から後期旧石器時代末期(LUP期)、下層から同前期(EUP期)の石器包含層を検出した。またそれを取り巻く高台にて炉をとまなうLUP期の居住面を検出した。湧水周辺の調査成果については2018年の第1次発掘成果分とあわせて国内学会で発表し、論文を国内査読誌に投稿中である。他に、タジキスタンにおける中期旧石器資料の調査を実施した。その成果を総説論文にまとめ国内査読誌に投稿中である。

◆3次元データによる瓦の同範認識技術の基礎的研究

代表者・林 正憲 基盤研究 (B) 新規

本研究ではSfM-MVSの技術を導入し、平城京・藤原京出土瓦の基準資料の精密な計測を通じて、従来「同範瓦」と認識されてきた資料の再検討をおこなうものである。将来的には、計測データを内外の研究者らに公開し、3次元データを用いた研究が、主要な研究手法の一つとなることを目指している。

初年度となる2019年度は、平城宮第一

次大極殿院所用瓦である6284-6664型式や、平城宮第二次大極殿および東区朝堂院地区で多用される6225-6663型式を中心に計測をおこない、それらのデータを元に各種分析をおこなった。それと併行しながら、計測手法の確立に向けて様々な状況下での計測実験もおこなった。

◆災害碑アーカイブ構築を目的とした市民参加型調査の実践

代表者：上相 英之 基盤研究 (B) 転入

本研究は、全国に多数存在する石碑のアーカイビングを、市民科学の手法を用いて収集することを目的とする。先の若手Bで開発したツール「EpiScan」は、シニアや中高生でも容易に使用できることを目標に作成しており、手順は簡便であり特別な機材を必要としない。初年度は共同研究者によるツールの試用とブラッシュアップをおこなった。また、東北・関東・近畿・九州の自治体や学校関係者とデータ収集調査の為に連携基盤を構築した。調査の嚆矢として、埼玉の高校生に機材とツールを貸与し、第三者による調査を実施した。当調査の様子は共同通信の取材を受け、3月18日付の信濃毎日・岩手日報等に掲載された。

◆カザフスタンにおける現生人類北回り拡散ルートの解明に関する国際共同研究の基盤強化

代表者・国武 貞克 国際共同研究強化 (B) 継続

カザフスタンにおけるIUP期の新人移住ルートの解明とEUP期における後期旧石器文化の形成と拡散過程を探索するために、踏査により新規に良好な層位的遺跡を発見し、発掘調査を実施することを目的としている。採択2年目の2019年度には、2017年に新規に発見したクズルアウス2遺跡の第2次発掘調査を実施した。その結果、内容の異なる石刃石器群を4枚の文化層に区分して3mのローム堆積層中より検出した。第1～第4文化層まで炭化物試料が得られたため、放射性炭素年代測定分析とOSL年代測定分析を実施し、EUP期後半の年代値が得られた。2018年の第1次発掘調査分とあわせて、海外査読誌に投稿中である。他にカザフ国立大所蔵の中期旧石器資料の調査を実施した。

◆律令制下の土器生産—須恵器・土師器群別分類の再構築

代表者・神野 恵 基盤研究 (C) 継続

2019年度は、須恵器と土師器の粘土選択に関する重要な違いを、蛍光X線分析と

電子顕微鏡による胎土中粒子の観察によってあきらかにした。また、これまで進めてきた和泉陶器窯と平城京近郊窯の出土品について、蛍光X線分析のデータを整理・検討した。その結果、和泉陶器窯と奈良山東部の窯では、化学成分の組成から、ある程度、分別が可能であることがわかった。そのうえで、平城宮出土須恵器について分析データを追加、検討した結果、奈良時代初めには奈良山東部窯での須恵器生産が始まっている可能性が高いことや、奈良時代中頃には奈良山が主要な生産地になっている可能性が高いことがわかった。

◆古代の灯火—先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究

代表者・深澤 芳樹 基盤研究 (C) 継続

本研究では、光を生みだす人工的なしくみを照明具と呼ぶ。現代にいたるまでその多くは、有機成分が酸化したときにおきる発光現象を利用してきた。樹木を燃やす松明等は、その例である。しかしこれは野外においては有効であっても、室内では燃焼の持続時間と発光量、それに管理の問題から、不適当であった。飛鳥時代以降日本列島にあらわれる、植物油料を燃料にした、灯心で発光させる灯火器は、この問題を解決したといえよう。

本年度は、中国における新事情の調査に加え、韓国から金武鍾氏と李相日氏に韓国における灯火器に関する最新研究を、新潟県津南町から石澤貴司氏に灯りの民俗資料からの新視点を、奈良文化財研究所に招いて、研究所研究員と灯りに関する合同検討会を開催した。

◆蛍光X線分析と鉍物組成分析による飛鳥藤原地域出土古代瓦の生産・供給体制の研究

代表者・清野 孝之 基盤研究 (C) 継続

本研究は、飛鳥藤原地区出土瓦と同範または深い関わりが推定される瓦について、理化学的分析(蛍光X線分析、鉍物組成分析)、考古学的調査を合わせておこない、その生産と供給の実態をあきらかにしようとするものである。研究期間の4年目、最終年度に当たる2019年度は、藤原宮出土軒瓦と同範の奈良県高取町市尾瓦窯出土軒瓦(6273A)、同瓦窯採集軒瓦(6643E)、奈良県平群町安養寺瓦窯採集軒瓦(6641C)等の調査をおこない、藤原宮所用瓦の生産の様相を把握するための手がかりを得た。また、年度末には4年間の研究期間中に実施した調査・研究の成果を報告書にまとめた。

◆6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究—奈良盆地を中心に—

代表者・廣瀬 覚 基盤研究 (C) 継続

本研究は、律令国家成立以前の支配制度のひとつであり、従来は文献史学を中心に研究がなされてきた「部民制」について、近年、飛躍的に深化している埴輪生産組織の復元研究に基づいて、考古学からその実態をあきらかにすることを目的とする。

2019年度は、引き続き奈良盆地およびその周辺地域を対象に、5世紀後半から6世紀にかけての埴輪の実見・検討を鋭意進めるとともに、奈良盆地を中心とする王権中枢部で見いだされた埴輪の系統差を超えて円筒埴輪の段構成が序列化されるというあり方が、全国的な埴輪の評価に適用できるかどうかを検討した。その結果、列島各地では主体的な生産が展開しつつも、大きくは王権を頂点とする序列化を受け入れている状況を確認することができた。それらの成果については、学会報告、論文等で公表、発信した。

◆明治～戦前期の木造建築に使われた良材の産地とその年輪データに関する基礎的研究

代表者・藤井 裕之 基盤研究 (C) 継続

最終年度となった2019年度は、かねてからの探索による成果にもとづき、四国(愛媛県)、および阿賀野川流域を中心とする新潟県と福島県会津地方で年輪データの収集を実施した。その結果、7件の建物からスギ、またはツガの天井板を中心に合計491点分の年輪計測用画像を得た。これらの計測は、点数が点数だけに、残念ながら完了せず、向こう数年をかけて作業し考察を進める予定である。あわよくば、四国産、または阿賀野川流域産と銘打った年輪データの把握につなげたいものである。一方、2017年度に収集した山形県庄内地方の建物に関する結果がまとまってきたが、この一帯の現生、古材双方のデータが十分ではない中、より深い考察をおこなうには、やはり今年度対象材の情報が必要なようである。空振りに終わるかもしれないが、とにかくデータ化が待ち遠しい。

◆古代における食生活の復元に関する環境考古学的研究

代表者・山崎 健 基盤研究 (C) 継続

本研究の目的は、遺跡から出土した食料残滓から、古代における食生活をあきらかにすることである。2019年度は、動物遺存体を継続的に集積するとともに、地方における海産物利用の研究を進めた。

研究成果については、『馬の考古学』に

「藤原宮造営と馬」、『日本歴史』に「平城宮跡から出土したウニの殻」を寄稿し、日本動物考古学会で「古代房総における貝類利用の実態」と題した口頭発表をおこなった。飛鳥資料館で開催した春季特別展『骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事』でも、得られた成果を紹介した。

◆Sr同位体比分析による日本出土「ナトロンガラス」の産地に関する考古学的研究

代表者・田村 朋美 基盤研究 (C) 継続

本研究は、日本出土のガラス製造物のSr同位体比分析を実施し、これまで特定することのできなかった生産地の特定を目指すものである。本年度は、飛鳥寺塔心礎出土のガラス小玉のSr同位体比を測定した。本ガラス小玉は化学組成の特徴からメソポタミア地域で生産された可能性が高いと推定されるガラスである。今回、本資料のSr同位体比を分析した結果、これまで調査したガラス資料の中でもっとも低いSr同位体比を示した($^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}:0.708346$)。このような低いSr同位体比はシリア内陸部のラッカ(ユーフラテス川中流域)で出土しているガラスと共通することがわかった。

◆展示施設を拠点とする地域住民参加型の歴史的建造物の調査

代表者・西田 紀子 基盤研究 (C) 継続

本研究は、展示施設を拠点に、地域住民のネットワークや地域に潜在する文化財を活かして、歴史的建造物や景観の変遷を調査研究することを目的とする。

3年目となる本年は、集落の建造物の分布調査に加えて、集落の生業、特に林業に関わる聞き取り調査を重点的におこなった。また森の現状と移り変わりについての踏査および明治時代の地籍図の調査をおこなった。調査成果については、特別展『飛鳥—自然と人と—』で紹介した。また特別展期間中に、協力して調査にあたった村民とともに、展示室でギャラリートークを開催した。

◆中央アジア西部ポスト・クシャーン朝期(4～7世紀)壁画の基礎的研究

代表者・影山 悦子 基盤研究 (C) 継続

本研究は、ガンダーラ美術に用いられる「ポスト・クシャーン朝期」という時代区分を中央アジア西部の美術に応用し、キダーラ、エフタル、西突厥がこの地域を支配した時代の美術を特定することを目的とする。

最終年度である2019年度は、ウズベキ

スタンにおいて出土遺物の調査をおこなうとともに、10月に研究セミナー「中央アジア西部の仏教遺跡と出土壁画について：ウズベキスタン南部ファヤズテパ遺跡出土壁画を中心に」を開催し、研究成果を報告した。

◆呪符木簡の時代的地域的特質からみた「木に文字を記す文化」の史的考究

代表者・山本 崇 基盤研究 (C) 継続

本申請研究は、呪符に込められた祈りや願い等人びとの心性の時代的地域的特質を検討することにより、「木に文字を記す文化」の日本の特質をあきらかにしようとするものである。3年目にあたる2019年度には、あらためて全国の発掘調査報告書を検索し、雑誌『木簡研究』等に未掲載であった呪符等をあらたに20件ほど見出し、学界で紹介することができた。それら新出資料等の調査は、年度末に予定し日程調整に入っていたが、新型コロナウイルスの影響で次年度に延期し、収集資料の積文入力作業を進めた。

◆3D石器形態研究の確立による日本列島後期旧石器時代の生活・技術・文化の解明

代表者・野口 淳 基盤研究 (C) 継続

本研究は3D計測データにより後期旧石器時代の石器製作技術と人類の行動を復元する方法論を確立することを目的とする。最終年度の2019年度は、東京都、宮崎県等の考古資料の計測と解析、秋田県の考古資料と実験製作資料の解析結果の分析・検討をおこない、その成果を日本旧石器学会、東北日本の旧石器文化を語る会等で報告、また国際研究集会(MORPH2019)を開催した。

◆初期官衙における空間構造の成立と展開に関する実証的研究

代表者・小田 裕樹 基盤研究 (C) 継続

本研究は、古代官都と地方官衙の建物・空間内でおこなわれた活動と空間利用の実態を考古学的分析によりあきらかにし、「ロの字形」を呈する初期官衙の歴史的特質を解明することを目的とする。

研究二年目にあたる今年度は、古代官都および地方官衙の各遺跡の実地踏査を実施した。特に、常陸国域および美濃国域を中心に国庁・郡庁に関連する遺跡の実地踏査と出土遺物の実見調査をおこなった。

これらの研究成果の一部については学術論文としてまとめており、来年度の公表予定である。

◆黒曜石資源の獲得と消費からみた先史時代九州の社会変化に関する基礎的研究

代表者・芝 康次郎 基盤研究 (C) 継続

本研究は、九州先史時代の主要石器石材である黒曜石の原産地と周辺地域において、黒曜石利用のあり方とその時空間的变化をあきらかにすることで、先史社会の変化を捉えようとするものである。2019年度は研究2年目にあたり、黒曜石原産地である腰岳での悉皆調査のほか、原産地周辺および消費地の縄文時代草創期～早期の遺跡での黒曜石利用の調査を実施した。とくに早期前半以降に出現する局部磨製石鏃出土遺跡を198遺跡集成し、それらの黒曜石利用偏重の様相をあきらかにした。

◆飛鳥時代・奈良時代の土器様式からみた日本古代の食具様式および食事法の復元的研究

代表者・森川 実 基盤研究 (C) 継続

本研究は、飛鳥時代・奈良時代における食器の器名研究と、土器の考古学的研究とを通じて、日本古代の食器・食具様式および食文化を再現しようとするものである。

2019年度は、2018年度の研究成果をふまえ、論文「奈良時代の埴・坏・盤」(『正倉院文書研究』16号)、「古代の陶白」(『古代文化』71-3号)、「麦埴と索餅」(『奈文研論叢』1号)を随時公表した。このほか、飛鳥時代および奈良時代の食器について計量的データの収集を継続的に実施し、その成果の一部を2019年7月のシンポジウム「飛鳥時代の土器編年再考」にて報告した。

◆藤原宮造営に伴う造瓦の新技術とその導入経路に関する総合的研究

代表者・石田 由紀子 基盤研究 (C) 継続

本研究の目的は、藤原宮造営という大事業に際し、瓦生産分野でおこなわれた技術改良や国内外との技術交流の実態を把握することである。

2年目となる2019年度は、昨年度に引き続き榎原市日高山瓦窯出土瓦の実測・拓本等の基礎作業を進めると同時に、日高山瓦窯に関連する遺跡である飛鳥藤原第17次調査から出土した瓦や窯壁についても整理を進めた。また、2019年度は奈文研と中国社会科学院との間にかわされた日中学术交流に参加する機会をえたため、中国の唐長安城や隋唐洛陽城、揚州城から出土した瓦について調査をおこない、主に製作技法の観点から藤原宮の瓦と比較するための基礎材料をえることができた。

◆近世における北前船と東北産木材の流通に関する年輪年代学的研究

代表者・光谷 拓実 基盤研究 (C) 継続

本年度は福井県下に所在する3棟の近世建築について現地調査をおこなった。3棟の建物に使われているヒバ材と思われる床板、縁板等を調査対象部材とした。これらの年輪データ化はまだ終わっていないものもあるが、このうち2棟の部材約30点の年輪パターン分析をおこなった結果、全体的に相関は低いことがわかった。これらと東北産ヒバ材の暦年標準パターンとの照合においても同様の結果が確認された。このことはヒバ材特有の年輪特性によるものなのかどうか、さらに事例を増やしあきらかにしていきたい。

◆近世末期から近代に生じた日本庭園の意匠の地域性と現代への継承—出雲地方を中心に—

代表者・中島 義晴 基盤研究 (C) 継続

出雲地方には、住宅等の座敷に面する平坦地を白砂敷きとして、短冊石という細長い長方形の切石や円形の石を飛石に用いて主景とする庭園が数多くあり、それらの意匠が現代も地域に深く根付いている。本研究では、このような地域的な特徴がどのように生まれたのかをあきらかにすることを目的とする。

今年度は、短冊石が使われた庭園に関する情報収集・現地調査を続けるとともに、近世以前の作庭書や露地・茶室に関する茶書を調べ、近世の庭園内の飛石における切石の利用について日本造園学会関西支部大会で発表した。

◆塩類風化が進行する遺跡構成材料からの効果的な脱塩方法の開発

代表者・脇谷 草一郎 基盤研究 (C) 新規

本研究は磨崖仏や横穴等のように、岩盤、地盤への水および塩の供給を絶つことができない環境にある遺跡を対象に、1) それらを構成する材料中の塩の移動および破壊プロセスのモデル化、2) 塩析出を抑制する環境条件の提案、および3) 遺跡表面に集積する塩の効率的な除去方法の開発を目的とする。2019年度は脱塩材としてバルブを用いることとして、その寸法安定性および塩の除去効率を向上する添加物について糖類や可溶性でんぷんをもちいた基礎実験をおこなった。また、磨崖仏や横穴等に多用される砂岩や凝灰岩を中心に、塩析出による破壊の有無および基質強化処理の効果をモデル化するために、ブランク試料および基質強化処理をおこなった石材試料の強度特性について物性測定を実施し

た。

◆ポスト・バイヨン期のクメール建築の建築的特徴に関する研究

代表者・大林 潤 基盤研究 (C) 新規

本研究は、カンボジア・アンコール地域のクメール建築において、13～15世紀のアンコール王朝末期(ポスト・バイヨン期)の遺跡を整理し、それぞれを比較研究することにより、この時期のクメール建築の特徴をあきらかにすることを目的とする。2019年度は、カンボジア・西トップ遺跡での現地調査をおこない、中央祠堂砂岩基壇外装の内部にあるラテライト製基壇の実測調査をおこない、復原平面図等を作成した。また、アンコール・トム内のテラス遺跡を調査し、西トップ遺跡の東テラスとの比較検討をおこなった。

◆日本と中国における大工道具の比較による東アジア木造建築技術史の基盤構築

代表者・李 暉 基盤研究 (C) 新規

本研究は、中国と日本の伝統的大工道具に関する比較研究を通して、東アジアの建築文化圏における古代建築造営の技術のさらなる解明を目指すものである。初年度となる2019年度は、日本建築学会大会にて、中国浙江省台州地区で調査した製材用の片刃の斧について報告し、中国北部に用いる<鑿子>(チョウナ)との相違点を論じた。また、中国文化遺産研究院が主催したシンポジウムにて、中国宋代の建築技術書『营造法式』(1103)における製材道具について講演した。現地調査としては、台州地区につき、浙江省の寧波地区における計69点の大工道具を実測調査した。

◆先端技術による未発見遺跡の探査・研究および保護手法の開発

代表者・金田 明大 挑戦的研究(開拓) 継続

空中・地上LiDARおよび物理探査技術と踏査等を組み合わせて森林内の未発見遺跡の検討をおこなう研究である。

2019年度はデータ提供された春日山・三笠山周辺の空中LiDARデータの解析をおこない、樹木の除去等の基礎作業を終え、人為的な地形改変の抽出を進めている。また、関連資料の調査を春日大社との連携で進めている。加えて新たに須恵器窯跡、古墳群の計測をおこなった。

◆歴史災害の実像解明への考古・歴史・地質学的複合解析による災害履歴検索地図の開発

代表者・村田 泰輔 挑戦的研究(開拓) 継続

2年度目に入った本研究は、奈良県および京都府の発掘調査で発見される地震災害、水害の痕跡情報を主体におよそ8千地点の情報を集積し、データベース化した。その結果、震度5弱以上の地震発生履歴が被災範囲と共にあきらかにみつある。データベースの検索内容に、古地理情報への対応を試験的に盛り込み始め、現在の緯度経度とあわせた形で古地理情報の提示を試みている。また検索システムとして、災害痕跡種、地点、地域、時間軸、距離軸で災害履歴情報を検索できる検索システムの導入をGIS型データベース上におこない、特に地震や火山噴火の発生予測に向けた、過去の災害実像解明のための「災害履歴検索地図」の発展的な開発を進めている。

◆機械学習による画像自動分類を活用した考古学ビッグデータの構造化と情報探索への適用

代表者・高田 祐一 挑戦的研究(萌芽) 新規

本研究では、膨大な情報資産を「考古学ビッグデータ」と捉え、機械学習により構造化を進めることにより流通性と再利用性の向上をはかる。

2019年度は、報告書デジタルデータから遺物図面・遺物写真・遺構図面・遺構写真等の種類に大別する教師データを作成した。その教師データをもとに機械学習による画像自動抽出プログラムで、報告書デジタルデータから類似画像を大量に抽出するテストプログラムを実装した。

◆日本考古学国際化のための考古学関係用語シソーラス構築と自動英語化の研究

代表者・高田 祐一 若手研究(A) 継続

本研究は、考古学関係用語シソーラスおよび考古学関係用語の日英対訳データベースを構築し、全国の発掘報告書の全文データを格納している「全国遺跡報告総覧」システムを拡張開発することで日本考古学の国際化に資することを目的とする。

2019年度は、文化財関係用語シソーラスの充実を図り、語彙数が190,228語となった。英語対訳は8,494となった。シソーラスの内部構造として上位下位関係を付与できるようにした。全国遺跡報告総覧に登録されている約24,000件の報告書(テキストデータ19億文字)を内容分析できるように用語共起度解析機能等を実装

した。

◆対照実験を主軸とした東アジア鑄造技術史解明のための実験考古学的研究

代表者・丹羽 崇史 若手研究(A) 継続

本研究は異なった条件で実験鑄造した試料どうしを比較検討する「対照実験」の手法を主軸として、殷周青銅器を中心とした東アジアの鑄造技術の解明に取り組むものである。2019年度は4年目の最終年度にあたる。

2019年度は、山西省考古研究所侯馬工作站(中国・侯馬)・山西博物院(同・太原)、アジア美術館(米国・サンフランシスコ)、国立慶州文化財研究所(韓国・慶州)等にて、青銅器・鑄型等の資料調査を実施した。また、前年度に引き続き、中国出土冶金関連遺物・青銅器等関連資料の集積を進めた。

研究成果は、年度末に本研究の成果をまとめた報告書を刊行したほか、『商周青銅器鑄造工芸研究』(科学出版社)に共同研究者との共著で論文を発表した。また、中国科学院自然科学史研究所での講演(11月12日・中国・北京)、ならびにアメリカ考古学会第84回年会(SAA 84th Annual Meeting)(4月13日・米国・アルバカーキ)、日本文化財科学会第36回大会(6月1・2日・東京)、アジア鑄造技術史学会2019西安大会(8月24・25日・中国・西安)、第二屆世界古都論壇暨紀念二里頭遺址科学発掘60周年學術研討会(10月20日・中国・偃師)、中国国家博物館「造幣与王朝-國際視野中錢幣的影響与改变」(11月13日・中国・北京)にて、研究成果を報告した。

◆中近世日本と東アジアにおける木造建築の変革に関する比較研究

代表者・鈴木 智大 若手研究(A) 継続

本研究は、東アジア木造建築史の構築に向けた研究構想の一環として、東アジア各国の木造建築を、社会的・技術的・自然環境的な側面から比較研究するものである。

2019年度は、韓国・楊州市で開催された国際シンポジウムにおいて、「13~14世紀における日本の禪宗寺院とその東アジアにおける意義」と題した研究発表をおこなった。

また、中国・敦煌において、第4回東アジア木造建築史研究会を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の蔓延にともない、延期した。またこれにあわせて、予定していた報告書刊行も延期した。社会情勢の動向を鑑みながら、2020年度における研究会開催、

報告書刊行を目指す。

◆土器残存脂質分析を用いた縄文-弥生移行期における土器利用と食性変化の追跡

代表者・庄田 慎久 若手研究(A) 継続

本研究は、土器残存脂質分析の方法を主に用いて、縄文時代から弥生時代にかけて、日本列島の各地でどのような食性・調理内容の変化があったのかを実証的に追跡しようとするものである。3年度目となる2019年度には、従来法による生物指標分析・個別脂質安定炭素同位体比分析に加え、熱分解ガスクロマトグラフ質量分析計を用いた新手法の洗練化のための実験をおこなった。

◆財政関係木簡による古代地方社会の実態解明

代表者・山本 祥隆 若手研究(B) 継続

本研究は、地方官衙遺跡で多く出土する財政関係木簡等の総合的な検討により、古代国家の支配システムとその運用の具体像、また古代地方社会の実態に迫ることを目的とする。

最終年度となる2020年度は、ひきつづき全国各地の木簡出土事例を収集しつつ、三重県桑名市・柚井遺跡出土木簡および遺跡現地の調査等をおこなった。また、これまでの成果を平城宮・京跡出土木簡の検討にも応用しながら調査結果をまとめ、紀要等の媒体を用いつつ成果発信に努めた。

◆古代都城における木器生産に関する基礎的研究

代表者・浦 蓉子 若手研究(B) 継続

本研究の目的は、平城宮・京における木器製作について、残された木屑等の痕跡からあきらかにすることにある。最終年度である2019年は、これまでの成果をまとめ、以下の報告をおこなった。

平城宮左京二条二坊十四坪から出土した「燃えさし」について樹種同定の成果と遺物の報告をおこなった。燃えさしには、平城宮・京等で数多く出土する曲物や人形、檜扇等木製品には見られない、木の節の影響を受けたゆがみのある材等が多く用いられている。このことは、平城宮・京において、製材時の端材の利用、もしくは建築部材等の廃材の転用を示しており、平城宮・京における木材利用サイクルを考えるにあたり有用な成果である。

また、平城宮跡、平城京跡から出土する木屑について、それらを考察するための方法論を整理した。さらに、形態の分類を進めるために現代の加工具とその木屑を対照させた写真図版を掲載した図書、『木屑を

考える 古代の木工活動を検討するための一試論』を刊行した。出土遺物としての木屑を検討するための重要な指標となる成果である。

◆二階建ての御殿にみる近世武家住宅の実体と空間の構成

代表者・大橋 正浩 若手研究 (B) 継続

本研究は、江戸時代に建てられた武家住宅のうち、私的に用いられたとされる二階建ての御殿に注目し、建物の実体と、利用の実態から、建築的な空間構成についてあきらかにしようとするものである。

2019年度は、これまで分析してきた旗本交代寄合美濃衆の西高木家と東高木家の陣屋に存在した二階建て建物について整理し、二階建て建物が建てられた理由を、建物自体の機能、庭園や知行地との関係から検討した。この成果については、奈文研で開催された庭園の歴史に関する研究会『庭園文化の近世的展開』で発表している。

◆風化金石文復元の為の用例辞書及び文字予測データベースの開発

代表者・上嶋 英之 若手研究 (B) 転入

研究の最終年度にあたり、データ入力とともに公開データベースの設置をおこなった。データ入力は紀伊半島の自然災害伝承碑(津波)のデータ収集を完了し、抽出した語句を用例辞書に登録した。また、碑文の簡易可視化技術「ひかり拓本」を開発し特許を出願した(2019年7月)。また当技術の普及を目的としたツール「EpiScan」を開発した。ツールを利用して収集した碑文の可読性の高い画像を公開する「ひかり拓本データベース」(<https://takuhon.lab.irides.tohoku.ac.jp>)を、東北大学災害科学国際研究所にて公開した。

◆地理情報システムを用いた古代日本における移動コスト算出の基礎的研究

代表者・清野 陽一 若手研究 (B) 継続

本研究の目的は、地理情報システム(GIS)を用いた古代日本における人間の移動時間(およびそれによって表現される移動コスト)の最適な計算条件(パラメータ)を、各種歴史的資料を分析することで解明することである。

4年目となる2019年は本来であれば最終年度であるのだが、残念ながら業務が例年になく多忙だったため、必要な実験を実施することが叶わなかった。したがって、研究を1年延長することとし、最終年度に充実した調査と報告ができるよう準備をおこなった。

◆出土木製遺物の水中保管時における劣化を効果的に抑制する手法の開発

代表者・松田 和貴 若手研究 (B) 継続

本研究は、出土木製遺物の水中保管環境における劣化を効果的に抑制するための、人的・経済的な負担や環境負荷が小さく、簡便かつ継続的に運用可能な手法の開発を目的としたものである。

最終年度となる2019年度は、一連の実験データをもとに、種々の環境条件の違いが、木材の劣化に及ぼす影響について定量的な検討をおこなった。その結果、水中における出土木製遺物の劣化抑制の要件を整理するとともに、これを実現するための比較的簡便な手法を提示するに至った。

研究成果の詳細については、今後、学会発表等による公表を予定している。

◆彩色文化財のTHz Imaging及び μ FocusX線CTを用いた非破壊 界面調査

代表者・金 旻貞 若手研究 (B) 継続

彩色文化財の内部構造手法としてテラヘルツ波イメージング法を用いた研究である。2019年度は、修理前後の調査を比較分析することで彩色層構造を解釈することや、これまでの結果をふまえて、修理後の診断技術として有効性を確かめた。

結果は、「慶陵東陵の西壁面人物画像のイメージング分析法による劣化損傷の評価」(第36回日本文化財科学会)、「テラヘルツ波イメージング技術を用いた彩色文化財の界面調査」同じタイトルの事例調査2、事例調査3を(2019年 東アジア文化遺産保存シンポジウム)において発表した。

◆地震痕跡を残す災害遺構の保存と公開活用に関する研究

代表者・小沼 美結 若手研究 (B) 継続

本研究は、国内外で発生した大規模な自然災害の跡地(災害遺構)とその関連施設について、保存に至った経緯と現状を網羅的に調査し、得られた知見を今後の災害遺構の保存と活用に活かすことを目的とする。

2019年度は、主に海外で保存されている災害遺構の記録や文献の調査・収集をおこなった。また、台湾の台中周辺に保存されている災害遺構(921地震教育園区や車籠埔断層保存園区等)の活用状況について、現地調査を実施した。

◆古墳時代中期王権中枢部における埴輪生産体制の実証的研究—奈良市佐紀古墳群を中心に—

代表者・大澤 正吾 若手研究 (B) 継続

本研究は、ウワナベ古墳出土埴輪を中心に佐紀古墳群出土埴輪の整理・研究を通じて、古墳時代中期の王陵級古墳における埴輪群組成の実態をあきらかにすることを目的とし、畿内中枢部における埴輪生産体制の時系列的な変化とその背後にある王権による労働力編成の在り方を実証的に論じることを目指す。3年目となる2019年度は、引き続きウワナベ古墳出土埴輪の注記、接合検討、実測をおこない、注記・接合検討をほぼ終えることができた。また、関連資料として東院下層埴輪窯出土資料の整理を進めた。

◆渤海遺跡出土建築部材の基礎的研究—三次元計測データの活用—

代表者・中村 亜希子 若手研究 (B) 継続

2019年度末までに、東京大学が所蔵する渤海国の紋様磚153点の三次元計測を終え、紋様の復元と成型型の考察をおこなった。その結果、上京城遺跡出土長方磚には4つ以上、方磚には3つ以上の筈が存在し、一部の筈は使用過程で紋様を彫り直したことが判明した。さらに、出土遺跡の検討から、渤海国における紋様磚の変遷をあきらかにした。

なお、フォトグラメトリーのソフトウェアのバージョンアップ前後における取得三次元データの特徴を比較する必要があると考えたため、本研究の研究期間を2020年度末まで延長することにした。

◆奈良時代に用いられた色材・素材のナノ構造解明

代表者・杉岡 奈穂子 若手研究 (B) 継続

本研究は、染色・絵画等に用いられる彩色材料に加え、文化財全体を構成する金属、木材、繊維、あるいは、漆・膠等の固着剤を含めた様々な物質で作られている「材料」の微細構造観察をおこなっている。これまでに、奈良時代に用いられた彩色材料について調査をおこなってきたが、緑色彩色からはCuが検出され、塩基性炭酸銅である緑青のほか、塩化銅等の使用が考えられる箇所もあり、使い分けて塗られていると思われる。さらに、緑色彩色のほかに青色、赤色、褐色、灰色等についても、天然染料のほか特有の構造が観察された。今後、微細構造観察からこれまで詳細が不明であった材料および技法を構造的にあきらかにしていく計画である。

◆シルクロード天山北路の形成過程に関する考古学的研究

代表者・山藤 正敏 若手研究 継続

本研究は、キルギス共和国北部に位置するチュー渓谷西部において精細な考古学踏査を実施し、シルクロード天山北路の形成過程をあきらかにすることを目的としている。

2年目である2019年度は、調査範囲（東西35km×南北50km）の北西部で集中的な調査を実施した。この結果、新規に30遺跡、既知の1遺跡を記録した。新規確認遺跡の多くは小規模であるが、調査地最北部では中型都市遺跡（規模6ha）も新たに確認できた。来年度は、遺跡が比較的残存している北東部および南部における重点的な分布調査を実施する予定である。

◆アンコール王朝の終焉と陶磁器需要の変容に関する考古学的研究

代表者・佐藤 由似 若手研究 継続

本研究は、カンボジア史の中でも衰退の時代と考えられてきたアンコール王朝末期からポスト・アンコール期にかけての王都出土遺物の調査をもとに、当時の社会・経済・宗教的変容について検討を試みるものである。2年目にあたる2019年度は、15～16世紀の王都スレイ・サントーの現地調査をおこない、前後する王都アンコール、ロンヴェークとの比較検討のための基礎資料を収集した。来年度は地図作成ならびにクメール陶器の同時代資料調査等を複合的に調査を進める予定である。

◆発掘後の劣化特性の予測技術に基づく出土鉄製文化財の新たな保存管理システムの構築

代表者・柳田 明進 若手研究 継続

本研究は鉄製文化財が出土した遺跡の埋蔵環境から、鉄製文化財の保管・展示環境下でのさらなる劣化進行の有無を予測し、それを未然に防ぐべく個々の鉄製文化財に応じた適切な保存・展示環境の提案を可能とすることを目的としており、その条件を実験的に検討している。2019年度は、マイクロO₂センサを併用したカラム腐食実験をおこない、腐食速度と含水率の関係にくわえて、腐食時の溶存酸素の拡散層の成長についても、実験的に特定した。また、日本文化財科学会等で学術発表をおこない、研究成果を公表した。

◆昭和初期における歴史的建造物保存修理の構造補強体系の構築

代表者・前川 歩 若手研究 継続

本研究では、昭和初頭から20年代頃ま

での古建築修理に、構造エンジニアがどのように介入し、受容され、どのような特質をもつのかをあきらかにし、歴史的建造物の保存修理において、その根幹をなす「構造補強」という行為を再考するための新たな枠組みを構築することを目的とする。

2年目となる2019年度は、戦前から昭和30年代を目処に重要文化財建造物修理報告書から構造補強に関わる項目を収集、整理をおこない、構造項目について分析をおこなった。

◆墨書木製品の分類を手がかりとした日本における木簡利用全史の解明

代表者・藤間 温子 若手研究 新規

本研究は、墨書木製品の分類を手がかりとして、時代によって変化していった日本人と木簡との関係をあきらかにすることを目的としている。雑多な墨書木製品を分類するためには、時代が降るにつれて増加する墨書木製品の用途を見極めることが必要である。そのために、既刊報告書等に記載の出土例、文献資料、伝世品の調査等から用例の収集をおこなう。

初年度となる2019年度は、出土事例の収集・整理を基本作業としたほか、伝世木製品の調査、絵図等に記載の木製器物の収集作業を進めた。

◆古代壁画の制作技法の伝習に関する研究—シルクロード近隣地域と日本の壁画を中心に

代表者・中田 愛乃 若手研究 新規

本研究はシルクロード近隣地域に位置する古代壁画を対象とし、それぞれに使用された技法および材料を調査し、比較することで、壁画の制作技法がどのような経路で日本へ伝習したのかを考察することを目的とする。

4カ年計画の初年度にあたる2019年度は、資料の収集と文献の調査、国内外に現存する古代壁画および絵画の現地調査をおこなった。次年度以降も引き続き情報の収集と調査を進め、各壁画に用いられた技法を考察するとともに、描画の初期工程で用いられた技法に焦点を当て、比較研究を進めていく予定である。

◆文化的景観における棚田集落の相対的価値の解明にむけた比較研究

代表者・恵谷 浩子 若手研究 新規

本研究は、宅地や山林等も含めた棚田集落全体に着目し、[自然条件]、[空間構造]、[生業のシステム]の比較研究を通じて、棚田集落の「典型性」と「独特性」を

示すポイントを整理・分析し、相対的な価値評価の基礎とすることを目的とする。

2019年度は、調査報告書や各種地図類等から棚田集落に関する情報収集とデータベース化をすすめた。また、鳥根県奥出雲町、高知県四万十市、熊本県山都町にて詳細調査を実施した。

◆セット論・生産流通論からみた古代国家成立期の馬装体系の変化に関する研究

代表者・片山 健太郎 研究活動スタート支援 継続

本研究は毛彫馬具のセット等、古墳時代終末期の馬具を主要な対象として、生産、使用の実態を資料に即してあきらかにすることをめざす。生産、使用の具体像に基づき、馬装体系と呼称される、馬具の種類と組み合わせにより様々な社会関係を表示するシステムが当該期には存在したのか、存在したのであれば、古墳時代後期の馬装体系とどのように異なるのかをあきらかにする。

2019年度は、第8回古代の馬研究会で、「古墳時代馬具の皮革素材」と題する研究発表をおこなったほか、6世紀末から7世紀にかけての馬具の編年研究を整理した。

◆中央アジアにおける後期旧石器時代初頭(IUP) 石器群の探求

代表者・国武 貞克 新学術領域研究 新規

中央アジアにおいて現在未発見である後期旧石器時代初頭(IUP期)の遺跡を探求することを目的としている。採択1年目の2019年度には資料調査の成果からその最有力候補とみているタジキスタンのフジ遺跡の発掘調査を実施した。その結果、大型石刃と尖頭器を組成する約4000点の石器群を、多量の獣骨とともに4枚の文化層に区分して、6.5mのローム層堆積より検出した。IUP期の可能性が高い放射性炭素年代測定結果を得ているが、現在のその結果を慎重に検討している。年代測定結果を除いた成果概要を国内研究報告会で報告した。他にカザフスタンのチョーカン・バリハノフ遺跡の第2次発掘調査を実施した。これは、2018年の第1次発掘調査で検出した9枚目の文化層の下層から10枚目の文化層を検出し、初めて炉を検出することができ、年代測定試料を採取した。その結果、IUP期からEUP期にかけての年代値が得られた。年代測定結果を除いた成果概要を海外査読誌に投稿し掲載された。

◆植物遺体群調査解析システムの構築による古代都城の植物資源利用と集落生態系の解明

代表者・上中 央子 特別研究員奨励費 新規

藤原京・平城京を中心とした発掘調査で出土する植物遺体群や堆積物中の花粉をはじめとする微化石群の情報を最大限に引き出すための新たな複合的解析システムを構築し、古代都城の人の生活を支えた植物資源の視点から、その背景にある集落生態系の特徴をあきらかにすることを目的とする。2019年度は、おもに既存成果報告の集成による植物遺体群データの再検討・再解釈を進めた。また、万葉集の植生学的研究と藤原宮下層運河出土植物遺体群との比較および当時の植生を検討し、飛鳥資料館の秋季展示「飛鳥—自然と人と—」に寄稿した。

◆奈良の都の木簡に会いに行こう！2019

代表者・渡辺 晃宏 研究成果公開促進費 新規

2019年8月21日（水）・22日（木）の両日、同一プログラムで、「奈良の都の木簡に会いに行こう！2019」を実施した。対象は小学校5・6年生と中学生で、参加者は21日20名、22日21名で、多数の保護者の方々の参加も得た。

木簡の実物に触れ、作業を体験してもらうことで、国宝にも指定された木簡についてもっと知ってもらい、歴史や考古学の面白さを実感し興味をもってもらいたいと考えて企画したものである。実習①木簡ってなに？—木簡を観察してみよう—、実習②木簡を見つけよう—木簡を含む遺物の洗浄・選別を体験—、実習③木簡に触れてみよう—木簡の水替え作業を体験—、実習④木簡を読んでみよう—木簡の解説に挑戦—を実施した。昼食には、奈良パークホテルの協力で、復元された古代食を含むお弁当を提供し、復元の根拠になった木簡を紹介するミニ講義や、木簡の保存処理設備の見学もおこなった。

木簡の整理・解説から保存に至る、木簡調査のさまざまな過程を体験する企画としては3年目にあたり、今回も木簡尽くしの充実した夏休みの1日を過ごしていただけたと思う。

学会・研究会等の活動

◆文化財写真技術研究会

2019年7月5～6日、第10回（通算31回）文化財写真技術研究会の総会と研究集会を、平城宮跡資料館講堂で開催した。令和最初の研究集会は、研究会設立30周年

の節目となった。特集テーマは「文化財写真研究30の論点」である。

1日目は、総会の後「祝 研究会設立30周年」と題して、研究会歴代会長（京博OBの金井杜男氏、奈文研OBの牛嶋茂氏・井上直夫氏）にご登壇いただき、中村一郎が司会進行する形で30年の活動を振り返る座談会をおこなった。

2日目午前は、小林宗正氏（ムネスタジオ）「アーカイブのための画像処理」の発表と、北田仁司氏（宮内庁正倉院事務所）進行で「フルサイズミラーレス元年」と題したカメラメーカーによる最新機材動向の発表がおこなわれた。

午後は、30年の研究会活動に軸足を置きながら文化財写真の過去から現在そして未来を見通す論点について、栗山雅夫の趣旨説明後「写真史的観点」「技術史的観点」「現状分析的観点」に類型化し、各3名計9名による発表がおこなわれた。

両日を通じて、写真に特化した形で30年もの研究会活動を続けてこられた背景には、先輩方の強い意志や会員の熱意とともに、活動目標である写真を通して文化財を記録し後世に遺すという普遍的な性質が変わらず存在してきたことを確認した。また、A4判化後ではもっとも多い頁数・執筆者数となる『文化財写真研究』Vol.10も刊行することができた。（栗山 雅夫）

◆庭園の歴史に関する研究会

2019年11月24日に、本庁舎4階会議室において庭園の歴史に関する研究会を開催した。2016年度から5カ年は近世庭園を研究対象としており、4年目の2019年度は「庭園文化の近世的展開」をテーマとし、永井博氏「偕楽園の機能的特質—教育・殖産振興施設の機能について—」、滝川重徳氏「金沢城の庭園」、大橋正浩氏「交代寄合美濃衆高木陣屋の建築と庭園」、藤川玲満氏「『都林泉名勝図会』の周辺」、高橋健太郎氏「国名勝 旧龍性院庭園と失われた神宮寺庭園—閉ざされた庭園と開かれた庭園—」、高橋知奈津「伯耆地方の民家の庭園」の研究報告があった。

総合討議では、殖産興業や科学技術の導入、大名庭園の公開、庶民の作庭等に関する各藩の政策の違いが、江戸時代後期の庭園の多様化に関係していること、また名所図会等の出版や参勤交代による人の往来が、庭園文化の拡大の要因となったことについて、議論がなされた。（高橋 知奈津）

◆木簡学会研究集会

2019年12月7・8日の両日、第41回木簡学会総会・研究集会を、平城宮跡資料館講

堂・小講堂において開催した（参加者137名）。

7日には、大宰府出土木簡の重要文化財指定を記念し、シンポジウム【大宰府と木簡】を開催した。松川博一氏（九州歴史資料館）「大宰府の官衙と木簡」、酒井芳司氏（九州歴史資料館）「大宰府成立期の木簡—七世紀木簡を中心に—」、大高広和氏（福岡県人づくり・県民生活部文化振興課世界遺産室）「木簡からみた西海道の軍事と交通」、吉野武氏（宮城県教育庁文化財課）「コメント：多賀城からみた大宰府史跡出土木簡」の報告の後、坂上康俊氏（九州大学）氏の総合司会で討論を行った。8日には、山本崇「2019年全国出土の木簡」、武田寛生氏（静岡県埋蔵文化財センター）・山本祥隆「静岡県尾羽廃寺跡の発掘調査と出土木簡」、内田保之氏（（公財）滋賀県文化財保護協会）「滋賀県上砥山遺跡の発掘調査と出土木簡」の事例報告があった。また、馬場基「『木簡庫』DBのオープンデータ化と木簡学会HP開設」で木簡の研究資源化についての紹介があった。

例年通り各調査機関の協力を得て実物の木簡を参加者の熟覧に供し、充分な実物観察を踏まえた多彩な議論を展開することができた。

なお、会誌『木簡研究』第41号を編集・刊行した。（編集担当：桑田訓也）

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮・京跡の整備

例年同様、国土交通省や文化庁による各種事業に対して、調査研究・協力・専門の見地からの助言等をおこなった。

国土交通省による第一次大極殿南門の復元工事は、2019年度には木工事が本格化し、工事の節目ごとに写真室職員による写真撮影をおこなうとともに、撮影写真の事業者間での共有化を図った。工事では定期的に工程会議が開催され、また伝統建築やその技術、建築材料等に関する、工事関係者を対象とした勉強会もそれにあわせて開かれた。こうした会議に参加するとともに、勉強会の講師として登壇する等した。5月25・26日、10月26・27日におこなわれた復元工事現場の特別公開にともない、発掘成果から南門の復元に至る解説パネルを作成し、また当日は来訪者の質問等に対応した。

2010年から進めている第一次大極殿の復元研究は、南門の扁額に関する所内検討会を開催し、題字の集字方法について検討した。さらに、扁額の取り付け方法から、扁額の規模の考え方について再整理をおこなった。また、製作が進む南門の金銅製の鴟尾に、拒鵠を取り付ける方法について、奈良時代の取り付け方法とともに、復元工事で用いる取り付け方法を検討した。拒鵠を立てる板を鴟尾に取り付けるという大極殿の復元工事も用いた方法は、出土瓦製鴟尾からはうかがえない。しかし、水を漏らさず耐久性を維持するという現代的な課題を満足させる方法は容易でなく、今後の東楼や西楼の鴟尾の復元への課題とすることとした。さらにこれまでの大極殿の復元研究についての報告書をまとめるべく、各種の作業をおこなった。

このほか、文化庁がおこなう平城宮跡の整備管理業務、歴史的環境維持業務等について、助言をおこなうとともに、現地において調整・対応した。

(箱崎 和久)



南門復元工事現場の特別公開における来客者への対応（2019年10月26日）撮影：奈文研

●高松塚古墳壁画の保存のための調査研究

国営飛鳥歴史公園内に設置された仮設修理施設において、高松塚古墳壁画の現状を把握するとともに材料に関する知見を得るために、石材、漆喰および彩色材料等に対する調査をおこなっている。

2019年度は石材、漆喰および彩色に関する調査研究を以下の通りおこなった。

石材の劣化状態について現状を把握するため、クラックの分布確認調査を実施し、2018年度に実施した結果と比較をおこなった。また、新たな保存活用のための施設が整備された後の仮設修理施設からの石材の輸送に備えて、輸送時および展示に用いるフレームについて検討するため、加速度計および変位計による計測をおこなった。石室石材の物理的性質として、二上山産凝灰岩試料を用いて放湿過程における平衡含水率と、各平衡含水状態における引張強度の測定をおこなった。

SfMの手法を用いて、三次元レーザースキャニング導入以前の2016年度調査データを再整理し、調査結果を三次元モデルとして提示した。また、築造当時の古墳の姿を周辺の地形や景観の復元モデルの中で再現するための基礎作業として、高松塚古墳や飛鳥の諸古墳を対象に周辺地形の詳細三次元モデルを2点作成した。

石室解体時に取り外した石室目地漆喰のうち、天井石1-2東側面目地漆喰の台座および水準杭の安定的な保管管理のための台座を作成した。

壁画の経年変化を把握するための記録撮影をおこなった。さらに、壁画材料の科学調査として、可視分光分析、テラヘルツ波イメージング、デジタルアーカイブスキャニング（赤外線、可視光線、紫外線）を実施した。壁画の色料を調査するためのX線回折分析装置を完成させた。

高松塚古墳壁画に対しておこなった一連の蛍光X線分析のデータを整理し、報告書を刊行した。

高松塚古墳壁画の保存・活用に資するため、熊本県指定田川内古墳の石室内環境および周辺環境の現地調査をおこなった。また、様々な環境下で壁画の保存・活用を実践しているイタリアにおいて類例調査を実施した。

高松塚古墳壁画仮設修理施設において、壁画保管室等の保管環境の管理、壁画の状態観察をおこなうとともに、文化庁と連携し、年間4回の仮設修理施設の一般公開において、研究員を派遣し、高松塚古墳壁画に関する解説をおこなった。

(高妻 洋成)



高松塚石室石材の振動に対する安定性調査。センサー設置状況。

●キトラ古墳に関する調査研究

遺物に関する事業では、石室床面から取り上げた土壌中に含まれていた漆塗木棺片についてX線透過撮影を実施した。その結果、泥や漆塗木棺片の間には鉛ガラス粒が残存している可能性が示唆された。

発掘調査成果の整理・活用にかかる事業としては、古墳の現状の周辺地形の三次元モデルを作成するとともに、古墳北側で三次元レーザー測量を実施した。

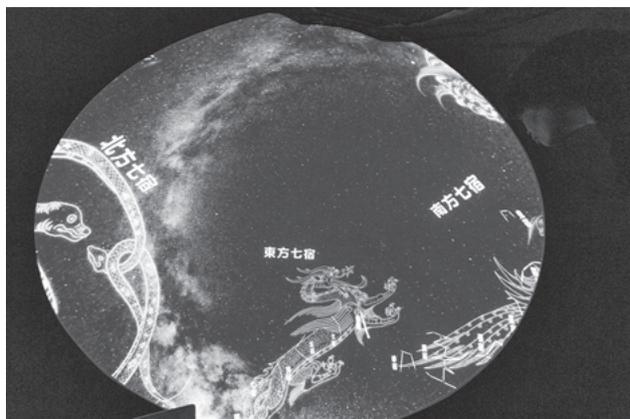
科学分析および壁画の記録撮影事業では、南壁について可視分光分析を実施し、赤色、黄色、黒色、白色等について分光スペクトルを取得した。また、壁画再構成後の南壁面について蛍光X線元素分析を実施し、画像部を中心に水銀を顕著に検出し、羽部では銅を、また僅かに鉛を検出した。壁画の定期的な点検法の検討では、南壁についてSfM/MVSによって取得したデータの解析をおこなうとともに、経年変化の検出が可能かどうかの試験をした。なお、例年と同様に高精度カメラによる経年変化の記録撮影も実施している。

文化庁壁画保存管理施設では、研究員が常駐して施設の日常管理および運営をおこなうとともに、壁画や出土遺物を展示公開した。壁画非公開期間は、展示室にて出土遺物等を公開し、パネル作成等の展示業務全般をおこなった。また、歩行性昆虫や環境カビの調査と温湿度調査を実施した。

古墳の活用にかかる事業としては、イタリアでの壁画保存活用状況を視察した。また、壁画に関する講演会と乾拓体験教室を実施した。秋・冬の壁画公開期間にはミニプラネタリウムを設置して、「キトラ古墳からみる古代中国の天文学」の投影イベントを計2回実施した。

キトラ古墳壁画は、2019年7月23日付で国宝指定された。告知のポスター・ちらしを作成するとともに、キトラ古墳と高松塚古墳の石室パーパークラフトを作成し、壁画公開参加者に配布した。

(玉田 芳英)



移動プラネタリウムの映像

現地説明会

◆2019年6月7日(金)

平城第612次調査(平城宮跡大極殿院地区)

発掘調査現地説明会

都城発掘調査部(平城地区)

主任研究員 桑田 訓也

参加者 180人 調査面積 400㎡

◆2019年9月29日(日)

平城第615次調査(平城宮東方官衙地区)

発掘調査現地説明会

都城発掘調査部(平城地区)

主任研究員 岩戸 晶子

参加者 892人 調査面積 1,200㎡

◆2019年10月6日(日)

飛鳥藤原第200次調査(藤原宮大極殿院)

発掘調査現地説明会

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)

研究員 松永 悦枝

参加者 971人 調査面積 1,179㎡

◆2019年11月10日(日)

東大寺東塔院跡発掘調査現地説明会

(東大寺・奈良県立橿原考古学研究所と共催)

都城発掘調査部(平城地区)

上席研究員 今井 晃樹

研究員 芝 康次郎

研究員 小田 裕樹

研究員 山本 祥隆

参加者 850人 調査面積 827㎡



平城第615次調査 現地説明会

2 研修・指導と教育

文化財担当者研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上を図るため、地方公共団体等の文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2019年度は、専門研修14課程を開催した。(2019年度文化財担当者研修課程の一覧参照)。研修の多くは、講義形式が主体であるが、研修後の感想文等によると、実地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であった。研修総日数75日、研修生総数199名であった。

各部・センターでは、要請にしたがって地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存処理、遺構の保存、遺構整備等に関して、指導および助言等の協力をおこなっている。2019年度の主な協力について一覧を別表に掲載した。このほか、文化庁、地方公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ、遺跡・遺物の保存、遺跡の整備および公開に関する調査、地下遺構の遺跡探査、動物遺存体分析、年輪年代測定等の共同研究や受託研究も進めている。

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻文化・地域環境論講座文化遺産学分野の客員教員として玉田芳英（考古学）、高妻洋成（保存科学）、尾野善裕（考古学）、馬場基（史科学）、山崎健（環境考古学）の5名がそれぞれの講義、演習および実習をおこなうとともに、文化遺産学分野を専攻する院生に対して必要に応じて奈良文化財研究所において研究指導をおこ

なった。

2018年度には、修士課程5名、博士後期課程7名に加え、京都大学大学院総合生存学館（思修館）総合生存学専修博士一貫課程の6年次学生を研究生として受け入れ、研究指導をおこなった。

奈良女子大学（大学院）との連携教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教員として、今井晃樹が「文化財学の諸問題Ⅰ・Ⅱ」を、神野恵が「歴史考古学特論Ⅰ・Ⅱ」を、渡辺晃宏が「歴史資料論Ⅰ・Ⅱ」を担当し、博士後期課程の大学院生への研究指導をおこなった。

いずれも平城宮・京跡等の遺跡や、そこから出土した瓦、土器・土製品、木簡・墨書土器をはじめとする文字資料等の遺物の検討、あるいは隋・唐、朝鮮三国、渤海等東アジアを視野に入れた比較研究等、実地の調査研究に密着した講義・演習であり、通常の大学院における授業では経験することのできない、奈良文化財研究所ならではの、特色ある教育を実践することができた。

奈良大学への教育協力

2019年度に引き続き「文化財修景学」（担当：文化遺産部遺跡整備研究室）に出講した。遺跡等の保護と整備について、最新事例を紹介しながら体系的に講義をおこない、平城宮跡において学外授業を実施した。

2019年度 日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧（委員の委嘱を受けているもの）

(青森) 三内丸山遺跡	(滋賀) 敏満寺石仏古墓跡 胡宮神社社務所庭園	跡群 高梁市旧吹屋小学校校舎 矢掛町
(岩手) 鳥海柵跡 徳丹城跡 胆沢城跡	日吉神社境内 清水山城館跡 永原御殿跡 京極家墓所	伝統的建造物群
(宮城) 多賀城跡	(京都) 宇治川太閤堤跡 大安寺旧境内附石橋瓦窯跡 浄瑠璃寺庭園 恭仁宮跡 高麗寺跡	(広島) 旧中島地区被爆遺構 毛利氏城跡 広島平和記念資料館
(秋田) 横手市伝統的建造物群 脇本城跡 弘田柵跡	(大阪) 百済寺跡 鳥坂寺跡 百舌鳥古墳群 日根荘遺跡 飯盛城跡 池上曾根遺跡 二子塚古墳 難波宮跡 旧西尾家住宅	(山口) 周防鑄銭司跡 周防国府跡等官衙遺跡 恵美須ヶ鼻造船所跡および大板山たたら製鉄遺跡
(福島) 上人檀庵寺跡	(兵庫) 赤穂城跡 山陽道野磨駅跡 石の宝殿 および竜山石採石遺跡 五色塚（千壺）古墳 小壺古墳	(徳島) 勝瑞城館跡 板東俘虜収容所跡
(茨城) 新治廃寺跡	(奈良) 春日古墳 上牧久渡古墳群 旧大乘院庭園 法隆寺金堂壁画 唐招提寺旧境内 橿原市伝統的建造物群 五條市伝統的建造物群 宇陀市松山地区伝統的建造物群 東大寺境内 市尾墓山古墳・宮塚古墳	(香川) 快天山古墳 丸亀城跡 讃岐国府跡
(栃木) 佐貫石仏	(鳥取) 大御堂廃寺跡 若桜町伝統的建造物群 小川家住宅	(高知) 土佐国分寺跡
(群馬) 上野国佐位郡正倉跡	(岡山) 出雲国府跡 石見銀山遺跡 荒神谷遺跡 三瓶小豆原埋没林 田和山史跡公園	(福岡) 大宰府史跡 大宰府跡推定客館地区 鴻臚館跡
(神奈川) 橋樹官衙遺跡群 円覚寺庭園白鷺池		(佐賀) 肥前陶器窯跡 三重津海軍所跡
(石川) 金沢城 真脇遺跡 野々市市遺跡		(長崎) 鷹島海底遺跡
(福井) 朝倉氏遺跡 兜山古墳 金ヶ崎城跡 柴田氏庭園 興道寺廃寺跡 若狹町伝統的建造物群 小浜藩松ヶ瀬台場跡		(熊本) 棚底城 大野窟古墳 今城大塚古墳 和水町史跡等
(長野) 上田城跡		(大分) 長者屋敷官衙遺跡 元町石仏 法鏡寺廃寺跡 納池公園
(岐阜) 岐阜城跡		(宮崎) 日向国府跡 蓮ヶ池横穴群
(静岡) 新居関跡 遠江国分寺跡 片山廃寺跡 江戸城石垣石丁場跡		
(愛知) 島原藩主深溝松平家墓所 旧龍性院庭園 三河国分寺跡		
(三重) 旧賓日館		

地方公共団体の文化財保護審議員等に係る遺跡等は除く

2019年度 文化財担当者研修課程一覧

区分	課 程	実施期日	定員	対象	内 容	担当室	研修 日数	応募 者数	受講 者数
専 門 研 修	建築遺構 調査課程	6月10日 ～ 6月14日	6～ 15名	地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	発掘調査で検出される建築遺構（竪穴建物・掘立柱建物・礎石建物・基壇）や出土建築部材に関して必要な、上部構造の専門的知識や発掘方法等についての研修。	遺構研究室	5日	8名	8名
	建造物 保存活用 基礎課程	7月1日 ～ 7月5日	8～ 15名	〃	文化財建造物にかかる、価値、制度、保存方法、活用方法、保存活用計画の策定等についての講義をおこない、自治体担当者としての基礎的な知識の習得を目指す。	建造物研究室	5日	20名	20名
	堆積・地質学 基礎課程	9月17日 ～ 9月20日	8～ 15名	〃	発掘調査に必要なとなる堆積学や地質学の基礎知識の習得を目的とする研修。	環境考古学 研究室	4日	32名	32名
	遺跡GIS 課程	9月24日 ～ 9月27日	8～ 15名	〃	GISの利用に関して必要な専門知識と技術の習得を目指した研修。	文化財情報 研究室	4日	8名	8名
	出土木器 調査課程	9月30日 ～ 10月4日	8～ 15名	〃	発掘調査において出土した木器の取り上げ、整理、調査、研究、保管、活用について、必要な専門知識と技術の習得を目的とする研修。	考古第1 研究室	5日	4名	4名
	保存科学Ⅱ (有機質遺物) 課程	10月15日 ～ 10月24日	6～ 15名	〃	出土有機質遺物の一時保管方法から保存処理方法についての基礎的な研修。	保存修復科学 研究室	7日	11名	11名
	文化財 三次元計測 課程	11月18日 ～ 11月22日	8～ 15名	〃	発掘調査や文化財の記録に必要なとなる三次元計測手法の基礎的な知識および外注の実際を学び、また実践可能な技術を習得することを旨とする。	遺跡・調査 技術研究室	5日	12名	12名
	文化財写真 課程	11月25日 ～ 12月5日	8～ 15名	〃	文化財の記録の中核をなす記録写真撮影について、様々な文化財写真分野の基礎知識と、デジタル写真を中心とした実習による実技を習得できる研修。	写真室	9日	11名	11名
	報告書 編集基礎 課程	12月5日 ～ 12月12日	8～ 15名	〃	文化財調査記録に必要な不可欠な報告書出版について、記述内容の意義や記述記録の基礎知識を習得するための研修。	企画調整室	6日	24名	24名
	報告書 デジタル作成 課程	12月12日 ～ 12月19日	8～ 15名	〃	報告書出版に必要な編集やコンテンツ制作の技術について、デジタル編集を中心に据えた実習で、技術を習得することを目的とした研修。	企画調整室	6日	13名	13名
	文化財 デジタル アーカイブ課程	1月20日 ～ 1月24日	8～ 15名	〃	デジタル技術を用いて、調査記録類および報告書の保存管理と公開活用を行うために必要な基礎知識を習得するための研修。	企画調整室	5日	18名	18名
	史跡 保存活用計画 策定課程	2月3日 ～ 2月7日	8～ 15名	〃	史跡の保存活用計画書の策定演習を通して、計画書の事務局案作成を行う。	遺跡整備 研究室	5日	36名	16名
	文化財 防災・減災 課程	2月12日 ～ 2月14日	8～ 15名	〃	自然災害等による文化財への被災に対する防災・減災への取り組みについての基礎知識の習得を目的とする研修。	遺跡・調査 技術研究室	3日	14名	12名
保存科学Ⅴ (材質・構造調査) 課程	2月18日 ～ 2月21日	6～ 15名	〃	出土遺物の保存処理に先立ち、主に非破壊的手法で実施する、材質・構造調査についての基礎的な研修。	保存修復科学 研究室	4日	10名	10名	

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事」

2019年4月23日～6月30日

奈良文化財研究所の環境考古学研究室でおこなっている調査研究の舞台裏にスポットを当て、そこからあきらかになった古代の人々と動物との関わりを紹介。展示室では実際の研究室を再現。東日本大震災の復興調査支援で分析した縄文時代の巨大マグロの骨等も展示した。会期中の入館者数10,024人。図録『骨ものがたり—環境考古学の研究室のお仕事』刊行。会期中の関連イベント「研究員を展示!」4回、「体験!研究員のお仕事」3回実施。

◆夏期企画展「第10回写真コンテスト「あすかの古墳」

2019年7月19日～9月1日

「あすかの古墳」をテーマに募集した114点の作品を会場に展示。飛鳥の古墳への関心を高めるため、古墳関連図書をまとめた「古墳ライブラリー」や「古墳マップ」を会場内に設置した。審査と来館者投票を経て決定した上位者を表彰し、撮影の講評会も実施した。会期中の入館者数3,070人。

◆秋期特別展「飛鳥—自然と人と—」

2019年10月11日～12月1日

人々の暮らしと自然が培ってきた飛鳥の景観の魅力を紹介。藤原宮跡出土植物遺存体研究の成果とともに、古写真や飛鳥資料館写真コンテスト入賞作等の多数の写真、古地図、新作した地形模型を展示。関連イベント「ふるさと飛鳥を語る」では、地元住民参加型のギャラリートークを実施。地域と連携して、新たな飛鳥の魅力を発信した。会期中の入館者数6,506人。図録『飛鳥—自然と人と—』刊行。関連イベント「飛鳥の森を探る」も実施。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2019」

2020年1月24日～2月26日

奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会との共催。飛鳥藤原地域の2018年度の発掘調査成果を紹介。坂田寺跡の瓦、石神遺跡の土器等の整理報告も。会期中の入館者数1,331人。図録『飛鳥の考古学2019』刊行。

平城宮跡資料館の展示

◆春期特別企画展「高御座—奈良朝の玉座—」

2019年4月22日～6月2日

2019年5月1日に新天皇が即位されたのを記念して、奈文研が1996年度に製作した、朝廷で重要な儀式がおこなわれる際に天皇が着座する玉座である高御座の10分の1模型と、その復元考証に関わる資料の展示をおこなった。会期中の入館者数14,456名。

◆夏期企画展「ならのみやこのしょくぶつえん」

2019年7月20日～9月1日・9月5日

夏のこども展示。奈良のみやこ「平城京」に住んでいた人々や地方からやってきた人々が目にした木々や草花と彼らの想いを展示したもの。舞台として設定した空想上の平城京植物園の四季折々のようすを木簡、瓦等の考古遺物、タネや花粉等の自然遺物、万葉集等をてがかりに考えてみた。同時期に奈良国立博物館で開催された「いのりの世界のどうぶつえん」展と連携し、夏休みの親子や外国からの参観者に古代の人々の自然観に触れてもらうことを目指した。期間中、ギャラリートーク2回、ワークショップ2回をそれぞれ実施、270名あまりの参加を得た。また、9月5日には国際博物館会議（ICOM）京都大会のオフサイトミーティングに対応した。会期中の入館者数9,162名。

◆秋期特別展「地下の正倉院展—年号と木簡—」

2019年10月12日～11月24日

平城宮・京跡出土木簡の実物展示をおこなう秋の特別展示。本年は新元号「令和」の施行を記念して、年号が記された木簡の展示を企画した。年号は、西暦701年の「大宝」から「令和」まで、途切れることなく連続して使われており、奈良時代は年号の本格的な使用が始まって間もない時代といえる。そんな、年号黎明期の奈良時代の年号をとりあげたタイムリーな展覧会となった。会期中の入館者数13,257名、ギャラリートーク3回実施（参加203名）。

◆冬期企画展「発掘された平城2019」

2020年2月1日～3月29日

その年度の『奈良文化財研究所紀要』に掲載された都城発掘調査部（平城地区）のおもだった発掘調査の成果を中心に、平城宮・京に関する奈文研の最新の調査・研究成果を展示公開するもの。今回は、平城宮東院地区、平城宮東区朝堂院、西大寺旧境内、平城京左京二条二

坊十五坪の調査と楊梅宮に関する最新の研究成果を取り上げた。なお、新型コロナウイルス感染防止のため、2月27日から3月31日まで休館した。会期中の入館者数3,515名、ギャラリートークを2回実施（参加48名）

このほか、新春ミニ展示「平城京の子」（2020年1月4日～1月26日）（20日間・4,456名）、第一次大極殿正殿での幢旗レプリカ特別公開（4月27日～2020年1月5日）を実施した。

2019年度 入館者数

飛鳥資料館（有料） 観覧料の詳細は71頁	平城宮跡資料館（無料）	合計
26,966人	71,408人	98,374人

解説ボランティア事業

平城宮跡への来訪者に対して、平城宮跡への理解を深めていただけるよう案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業については、1999年10月

から実施しているが、2018年1月より新たな制度のもとで、活動を開始した。

2020年3月31日現在、所定の研修を受けた解説ボランティアの登録数は147名を数え、定点6カ所の解説のほか事前予約による宮跡内ツアーガイドもおこなっている。

2019年度「平城宮跡解説ボランティア」の活動状況（活動日数274日間）

各定点において解説を受けた来訪者延べ人数								解説をした平城宮跡 解説ボランティアの 延べ人数
平城宮跡資料館	第一次大極殿	遺構展示館	朱雀門	東院庭園	ツアーガイド	平城宮 いざない館	計	
15,298人	21,639人	7,668人	17,767人	6,981人	3,138人	14,518人	87,009人	4,064人

*活動は、定点施設の休館日を除く毎日。

2020.3.31現在

図書資料・データベースの公開

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の資料を収集している。また、新庁舎図書資料室においても一般公開施設として公開し、より快適な環境下で所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌および展覧会カタログ等の閲覧・複写サービスを行っている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸し出し、複写サービスを行っている。

また、奈文研の刊行物についても、主要なものについてはPDF化をおこない、学術情報リポジトリからインターネットを通じて公開している。

公開データベース一覧		2019年度 アクセス件数
1	木簡庫 (Wooden Tablet Database)	51,455
	木簡庫 (Wooden Tablet Database) 韓国語版	822
	木簡庫 (Wooden Tablet Database) 繁体中文	710
	木簡庫 (Wooden Tablet Database) 简体中文	680
	木簡庫 (Wooden Tablet Database) 英語版	1,189
2	木簡庫 (Wooden Tablet Database) / 電子くずし字字典データベース連携検索	119,424
3	史的文字データベース連携検索システム (実証試験版)	※1
4	木簡・くずし字解読システム-MOJIZO-	742,399
5	木簡人名データベース	※2
6	全国木簡出土遺跡・報告書データベース	1,639
7	和同開珎出土遺跡データベース	262
8	平城京出土陶硯データベース	783
9	3D Bone Atlas Database	※2
10	遺跡データベース	6,432
11	古代地方官衙関係遺跡データベース	2,064
12	古代寺院遺跡データベース	3,844
13	官衙関係遺跡整備データベース	405
14	古代地名検索システム	25,119
15	遺跡の斜面保護データベース	131
16	発掘庭園データベース	586
17	Japanese Garden Dictionary	※2
18	薬師寺典籍文書データベース	771
19	大官家文書データベース	524
20	所蔵図書データベース	75,836
21	報告書抄録データベース	15,579,640
22	全国遺跡報告総覧	
23	考古関連雑誌論文情報補完データベース	3,084
24	遺跡報告内論考データベース	1,410
25	学術情報リポジトリ	34,807

※1: コロナの影響により、アクセス管理機能の実装が2020年7月15日となった。

※2: アクセス数のカウントをしていない。

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所 学報

- 第1冊 仏師運慶の研究 (1954)
 第2冊 修学院離宮の復原的研究 (1954)
 第3冊 文化史論叢 (1954)
 第4冊 奈良時代僧房の研究 (1957)
 第5冊 飛鳥寺発掘調査報告 (1958)
 第6冊 中世庭園文化史 (1959)
 第7冊 興福寺食堂発掘調査報告 (1959)
 第8冊 文化史論叢 I (1960)
 第9冊 川原寺発掘調査報告 (1960)
 第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告 (1961)
 第11冊 院の御所と御堂—院家建築の研究— (1962)
 第12冊 巧匠安阿弥陀仏快慶 (1962)
 第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察 (1962)
 第14冊 唐招提寺蔵「レース」と「金亀舍利塔」に関する研究 (1962)
 第15冊 平城宮発掘調査報告 II
官衙地域の調査 (1962)
 第16冊 平城宮発掘調査報告 III
内裏地域の調査 (1963)
 第17冊 平城宮発掘調査報告 IV
官衙地域の調査 2 (1966)
 第18冊 小堀遠州の作事 (1966)
 第19冊 藤原氏の氏家とその院家 (1968)
 第20冊 名物裂の成立 (1970)
 第21冊 研究論集 I (1972)
 第22冊 研究論集 II (1974)
 第23冊 平城宮発掘調査報告 VI
平城京左京一条三坊の調査 (1975)
 第24冊 高山一町並調査報告— (1975)
 第25冊 平城京左京三条二坊 (1975)
 第26冊 平城宮発掘調査報告 VII
内裏北外郭の調査 (1976)
 第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I (1976)
 第28冊 研究論集 III (1976)
 第29冊 木曾奈良井一町並調査報告— (1976)
 第30冊 五條一町並調査の記録— (1977)
 第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II (1978)
 第32冊 研究論集 IV (1978)
 第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告 (1978)
 第34冊 平城宮発掘調査報告 IX
宮城門・大垣の調査 (1978)
 第35冊 研究論集 V (1979)
 第36冊 平城宮整備調査報告 I (1979)
 第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 III (1980)
 第38冊 研究論集 VI (1980)
 第39冊 平城宮発掘調査報告 X
古墳時代 I (1981)
 第40冊 平城宮発掘調査報告 XI
第一次大極殿地域の調査 (1982)
 第41冊 研究論集 VII (1984)
 第42冊 平城宮発掘調査報告 XII
馬寮地域の調査 (1985)
 第43冊 日本における近世民家 (農家) の系統的発展 (1985)
 第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告 (1986)
 第45冊 薬師寺発掘調査報告 (1987)
 第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書 (1989)
 第47冊 研究論集 VIII (1989)
 第48冊 年輪に歴史を読む
—日本における古年輪学の成立— (1990)
 第49冊 研究論集 IX (1991)
 第50冊 平城宮発掘調査報告書 XIII
内裏の調査 II (1991)
 第51冊 平城宮発掘調査報告書 XIV
平城宮第二次大極殿院の調査 (1993)
 第52冊 西隆寺発掘調査報告書 (1993)
 第53冊 平城宮朱雀門の復原的研究 (1994)
 第54冊 平城京左京二条二坊・三条二坊
—長屋王邸・藤原麻呂邸—発掘調査報告 (1995)
 第55冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 IV
—飛鳥水落遺跡の調査— (1995)
 第56冊 平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告 (1997)
 第57冊 日本の信仰遺跡 (1999)
 第58冊 研究論集 X (1999)
 第59冊 中世瓦の研究 (2000)
 第60冊 研究論集 XI (2000)
 第61冊 研究論集 XII (2001)
 第62冊 史跡頭塔発掘調査報告 (2001)
 第63冊 山田寺発掘調査報告 本文編
図版編 (2002)
 第64冊 研究論集 XIII
中国古代の葬玉 (2002)
 第65冊 文化財論叢 III 奈良文化財研究所

- 創立五十周年記念論文集 (2002)
- 第66冊 研究論集ⅩⅦ
東アジアの古代都城 (2003)
- 第67冊 平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
旧石器時代編 [法華寺南遺跡] (2003)
- 第68冊 吉備池廃寺発掘調査報告
百濟大寺跡の調査 (2003)
- 第69冊 平城宮発掘調査報告ⅩⅧ
東院庭園地区の調査 (2003)
- 第70冊 平城宮発掘調査報告ⅩⅧ
兵部省地区の調査 (2005)
- 第71冊 飛鳥池遺跡発掘調査報告Ⅰ (2004)
- 第72冊 奈良山発掘調査報告Ⅰ
石のカロト古墳・音乗谷古墳の調査 (2005)
- 第73冊 タニ窯跡 A6号窯跡発掘調査報告 (2005)
- 第74冊 古代庭園研究Ⅰ (2005)
- 第75冊 研究論集ⅩⅧ
中国古代の銅剣 (2006)
- 第76冊 法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告 (2007)
- 第77冊 日韓文化財論集Ⅰ (2008)
- 第78冊 近世瓦の研究 (2008)
- 第79冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅰ
基壇・礎石 (2009)
- 第80冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅳ
瓦・屋根 (2009)
- 第81冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅱ
木部 (2010)
- 第82冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅲ
彩色・金具 (2010)
- 第83冊 研究論集ⅩⅧ
鉄製武器の流通と初期国家形成 (2010)
- 第84冊 平城宮発掘調査報告ⅩⅧ
第一次大極殿院地区の調査Ⅱ 本文編/図版編 (2011)
- 第85冊 漢長安城桂宮 報告編・論考編 (2011)
- 第86冊 研究論集ⅩⅧ
平安時代庭園の研究—古代庭園研究Ⅱ— (2011)
- 第87冊 日韓文化財論集Ⅱ (2011)
- 第88冊 西トップ遺跡調査報告
—アンコール文化遺産保護共同研究報告書— (2011)
- 第89冊 四万十川流域 文化的景観研究 (2011)
- 第90冊 Western Prasat Top Site Survey Report
on Joint Research for the Protection of the
Angkor Historic Site (2012)

- 第91冊 遼寧省朝陽地区隋唐墓の整理と研究 (2012)
- 第92冊 文化財論叢Ⅳ 奈良文化財研究所 創立六十
周年記念論文集 (2012)
- 第93冊 奈良山発掘調査報告Ⅱ—歌姫西須恵器窯の調
査— (2014)
- 第94冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ—藤原京左京六
条三坊の調査— (2017)
- 第95冊 日韓文化財論集Ⅲ (2015)
- 第96冊 中世庭園の研究—鎌倉・室町時代— (2015)
- 第97冊 名勝旧大乗院庭園発掘調査報告書 (2020)
- 第98冊 東アジア考古学論叢Ⅱ (2020)

奈良文化財研究所 史料

- 第1冊 南無阿弥陀仏作善集 (複製) (1955)
- 第2冊 西大寺叡尊伝記集成 (1956)
- 第3冊 仁和寺史料 寺誌編Ⅰ (1964)
- 第4冊 俊乗房重源伝記集成 (1965)
- 第5冊 平城宮木簡一 図版 (1966)
解説 (1969)
(平城宮発掘調査報告Ⅴ)
- 第6冊 仁和寺史料 寺誌編Ⅱ (1968)
- 第7冊 唐招提寺史料第一 (1971)
- 第8冊 平城宮木簡二 図版 (1974) 解説 (1975)
(平城宮発掘調査報告Ⅷ)
- 第9冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ (1975)
- 第10冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ (1976)
- 第11冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ (1977)
- 第12冊 藤原宮木簡一 図版・解説 (1978)
- 第13冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ (1978)
- 第14冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ (1979)
- 第15冊 東大寺文書目録第1巻 (1979)
- 第16冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ (1979)
- 第17冊 平城宮木簡三 図版・解説 (1981)
- 第18冊 藤原宮木簡二 図版・解説 (1981)
- 第19冊 東大寺文書目録第2巻 (1981)
- 第20冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅶ (1980)
- 第21冊 東大寺文書目録第3巻 (1981)
- 第22冊 七大寺巡礼私記 (1982)
- 第23冊 東大寺文書目録第4巻 (1982)
- 第24冊 東大寺文書目録第5巻 (1983)
- 第25冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅰ (1983)
- 第26冊 東大寺文書目録第6巻 (1984)
- 第27冊 木器集成図録—近畿古代編— (1985)
- 第28冊 平城宮木簡四 図版・解説 (1986)
- 第29冊 興福寺典籍文書目録第1巻 (1986)
- 第30冊 山内清男考古資料Ⅰ (1988)

- 第31冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅱ (1988)
- 第32冊 山内清男考古資料2 (1989)
- 第33冊 山内清男考古資料3 (1992)
- 第34冊 山内清男考古資料4 (1992)
- 第35冊 山内清男考古資料5 (1992)
- 第36冊 木器集成図録—近畿原始編— (1993)
- 第37冊 梵鐘実測図集成 (上) (1993)
- 第38冊 梵鐘実測図集成 (下) (1993)
- 第39冊 山内清男考古資料6 (1993)
- 第40冊 山田寺出土建築部材集成 (1995)
- 第41冊 平城京木簡一 図版・解説 (1995)
- 第42冊 平城宮木簡五 図版・解説 (1996)
- 第43冊 山内清男考古資料7 (1996)
- 第44冊 興福寺典籍文書目録第2巻 (1996)
- 第45冊 北浦定政関係資料 (1997)
- 第46冊 山内清男考古資料8 (1997)
- 第47冊 北魏洛陽永寧寺 (1998)
- 第48冊 発掘庭園資料 (1998)
- 第49冊 山内清男考古資料9 (1998)
- 第50冊 山内清男考古資料10 (1999)
- 第51冊 山内清男考古資料11 (2000)
- 第52冊 地域文化財の保存修復 考え方と方法 (2000)
- 第53冊 平城京木簡二 図版・解説 (2001)
- 第54冊 山内清男考古資料12 (2000)
- 第55冊 法隆寺古絵図集 (2001)
- 第56冊 法隆寺考古資料 (2002)
- 第57冊 日中古代都城図録 (2002)
- 第58冊 山内清男考古資料13 (2002)
- 第59冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅲ (2003)
- 第60冊 平城京条坊総合地図 (2003)
- 第61冊 鞏義黄冶唐三彩 (2003)
- 第62冊 北浦定政関係資料
松の落ち葉一 (2003)
- 第63冊 平城宮木簡六 図版・解説 (2004)
- 第64冊 平城京出土古代官銭集成Ⅰ (2004)
- 第65冊 北浦定政関係資料
松の落ち葉二 (2004)
- 第66冊 山内清男考古資料14 (2004)
- 第67冊 興福寺典籍文書目録第3巻 (2004)
- 第68冊 古代東アジアの金属製容器Ⅰ 中国編 (2004)
- 第69冊 平城京漆紙文書 (一) (2005)
- 第70冊 山内清男考古資料15 (2005)
- 第71冊 古代東アジアの金属製容器2 朝鮮・日本編 (2005)
- 第72冊 畿内産土師器集成西日本編 (2005)
- 第73冊 黄冶唐三彩窯の考古新発見 (2005)
- 第74冊 山内清男考古資料16 (2006)
- 第75冊 平城京木簡三 二条大路木簡1 (2006)
- 第76冊 評制下荷札木簡集成 (2006)
- 第77冊 平城京出土陶硯集成Ⅰ (2006)
- 第78冊 黒草紙・新黒双紙 (2007)
- 第79冊 飛鳥藤原京木簡一 図版・解説 (2007)
- 第80冊 平城京出土陶硯集成二 平城京・寺院 (2007)
- 第81冊 高松塚古墳壁画フォトマップ資料 (2009)
- 第82冊 飛鳥藤原京木簡二 図版・解説 (2009)
- 第83冊 興福寺典籍文書目録 第四巻 (2009)
- 第84冊 山内清男考古資料17 (2009)
- 第85冊 平城宮木簡七 図版・解説 (2010)
- 第86冊 キトラ古墳壁画フォトマップ資料 (2011)
- 第87冊 明治時代平城宮跡保存運動史料集 (2011)
- 第88冊 藤原宮木簡三 図版・解説 (2012)
- 第89冊 仁和寺史料 古文書編一 (2013)
- 第90冊 大宮家文書調査報告書 (2014)
- 第91冊 藤原宮木簡四 図版・解説 (2019)
- 第92冊 木器集成図録—飛鳥藤原編Ⅰ— (2019)
- 第93冊 薬師寺文書目録第1巻 (2019)
- 第94冊 仁和寺史料 古文書編二 (2020)
- 奈良文化財研究所 研究報告**
- 第1冊 文化的景観研究集会 (第1回) 報告書 (2009)
- 第2冊 河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概要 (2010)
- 第3冊 古代東アジアの造瓦技術 (2010)
- 第4冊 古代官衙・集落研究会報告書「官衙と門」報告編/資料編 (2010)
- 第5冊 文化的景観研究集会 (第2回) 報告書 (2010)
- 第6冊 第14回古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と鉄」 (2011)
- 第7冊 文化的景観研究集会 (第3回) 報告書 (2011)
- 第8冊 鞏義白河窯の考古新発見 (2012)
- 第9冊 第15回古代官衙・集落研究会報告書「四面廂建物を考える」報告編/資料編 (2012)
- 第10冊 文化的景観研究集会 (第4回) 報告書 (2012)
- 第11冊 河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査 (2013)
- 第12冊 第16回古代・官衙・集落研究会報告書「塩の生産・流通と官衙・集落」 (2013)
- 第13冊 文化的景観研究集会 (第5回) 報告書 (2013)
- 第14冊 第17回古代官衙・集落研究会研究報告書「長舎と官衙の建物配置」報告編/資料編 (2014)
- 第15冊 第18回古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と土器Ⅰ」 (2015)
- 第16冊 キトラ古墳天文図 星座写真資料 (2016)
- 第17冊 藤原宮跡出土馬の研究 (2016)

- 第18冊 第19回古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と土器2」(2016)
- 第19冊 第20回古代官衙・集落研究会報告書「郡庁域の空間構成」(2017)
- 第20冊 第21回古代官衙・集落研究会報告書「地方官衙政庁域の変遷と特質」報告編／資料編(2018)
- 第21冊 デジタル技術による文化財情報の記録と利活用(2019)
- 第22冊 ユーラシア考古学研究資料1『カザフスタン後期旧石器文化の研究』(2018)
- 第23冊 第22回古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と大甕」(2019)
- 第24冊 デジタル技術による文化財情報の記録と利活用2(2019)
- 第25冊 ユーラシア考古学資料I—タジキスタン中期旧石器文化の研究(2020)
- 第18冊 壬申の乱(1987)
- 第19冊 古墳を科学する(1988)
- 第20冊 聖徳太子の世界(1988)
- 第21冊 仏舎利埋納(1989)
- 第22冊 法隆寺金堂壁画飛天(1989)
- 第23冊 日本書紀を掘る(1990)
- 第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察(1991)
- 第25冊 飛鳥の源流(1991)
- 第26冊 飛鳥の工房(1992)
- 第27冊 古代の形(1995)
- 第28冊 蘇我三代(1995)
- 第29冊 齊明紀(1996)
- 第30冊 遺跡を測る(1997)
- 第31冊 それからの飛鳥(1998)
- 第32冊 UTAMAKURA(1998)
- 第33冊 幻のおおでら—百済大寺(1998)
- 第34冊 鏡を作る—海獣葡萄鏡を中心として(1999)
- 第35冊 あすかの石造物(2000)
- 第36冊 飛鳥池遺跡(2000)
- 第37冊 遺跡を探る(2001)
- 第38冊 ‘あすか—以前’ (2002)
- 第39冊 A0の記憶(2002)
- 第40冊 古年輪(2003)
- 第41冊 飛鳥の湯屋(2004)
- 第42冊 古代の梵鐘(2004)
- 第43冊 飛鳥の奥津城—キトラ・カラト・マルコ・高松塚(2005)
- 第44冊 東アジアの古代苑池(2005)
- 第45冊 キトラ古墳と発掘された壁画たち(2005)
- 第46冊 キトラ古墳壁画四神玄武(2006)
- 第47冊 奇偉莊巖山田寺(2007)
- 第48冊 キトラ古墳壁画十二支—子・丑・寅—(2008)
- 第49冊 まぼろしの唐代精華—黄冶唐三彩窯の考古新発見—(2008)
- 第50冊 キトラ古墳壁画四神—青龍白虎—(2009)
- 第51冊 三燕文化の考古新発見—北方騎馬民族のかがやき—(2009)
- 第52冊 キトラ古墳壁画四神(2010)
- 第53冊 木簡黎明—飛鳥に集ういにしへの文字たち—(2010)
- 第54冊 星々と日月の考古学(2011)
- 第55冊 飛鳥遺珍—のこされた至宝たち—(2011)
- 第56冊 比羅夫がゆく—飛鳥時代の武器・武具・いくさ—(2012)
- 第57冊 花開く都城文化(2012)
- 第58冊 飛鳥寺2013(2013)

奈良文化財研究所 基準資料

- 第1冊 瓦編1 解説(1974)
- 第2冊 瓦編2 解説(1975)
- 第3冊 瓦編3 解説(1976)
- 第4冊 瓦編4 解説(1977)
- 第5冊 瓦編5 解説(1977)
- 第6冊 瓦編6 解説(1979)
- 第7冊 瓦編7 解説(1980)
- 第8冊 瓦編8 解説(1981)
- 第9冊 瓦編9 解説(1984)

飛鳥資料館 図録

- 第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏(1976)
- 第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文編(1977)
- 第3冊 日本古代の墓誌(1977)
- 第4冊 日本古代の墓誌 銘文編(1978)
- 第5冊 古代の誕生仏(1978)
- 第6冊 飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺—(1979)
- 第7冊 日本古代の鴟尾(1980)
- 第8冊 山田寺展(1981)
- 第9冊 高松塚拾年(1982)
- 第10冊 渡来人の寺—桧隈寺と坂田寺—(1983)
- 第11冊 飛鳥の水時計(1983)
- 第12冊 小建築の世界—埴輪から瓦塔まで—(1984)
- 第13冊 藤原宮—半世紀にわたる調査と研究—(1984)
- 第14冊 日本と韓国の塑像(1985)
- 第15冊 飛鳥寺(1985)
- 第16冊 飛鳥の石造物(1986)
- 第17冊 萬葉乃衣食住(1987)

- 第59冊 飛鳥・藤原京への道 (2013)
 第60冊 いにしへの匠たち—ものづくりからみた飛鳥時代— (2014)
 第61冊 はぎとり・きりとり・かたどり—大地にきざまれた記憶— (2014)
 第62冊 はじまりの御仏たち (2015)
 第63冊 キトラ古墳と天の科学 (2015)
 第64冊 文化財を撮る—写真が遺す歴史 (2016)
 第65冊 祈りをこめた小塔 (2016)
 第66冊 早川和子が描く飛鳥むかしむかし (2017)
 第67冊 藤原京を掘る—藤原京一等地の調査— (2017)
 第68冊 高松塚古墳を掘る—解明された築造方法— (2017)
 第69冊 あすかの原風景 (2018)
 第70冊 よみがえる飛鳥の工房—日韓の技術交流を探る— (2018)
 第71冊 骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事— (2019)
 第72冊 飛鳥—自然と人と— (2019)

飛鳥資料館 カタログ

- 第1冊 仏教伝来飛鳥への道 (1975)
 第2冊 飛鳥の寺院遺跡1—最近の出土品 (1975)
 第3冊 飛鳥の仏像 (1978)
 第4冊 桜井の仏像 (1979)
 第5冊 高取の仏像 (1980)
 第6冊 檀原の仏像 (1981)
 第7冊 飛鳥の王陵 (1982)
 第8冊 大官大寺—飛鳥最大の寺— (1985)
 第9冊 高松塚の新研究 (1992)
 第10冊 飛鳥の一と—最近の調査から— (1994)
 第11冊 山田寺 (1996)
 第12冊 山田寺東回廊再現 (1997)
 第13冊 飛鳥のイメージ (2001)
 第14冊 古墳を飾る (2005)
 第15冊 うずもれた古文書—みやこの漆紙文書の世界— (2006)
 第16冊 飛鳥の金工海獣葡萄鏡の諸相 (2006)
 第17冊 飛鳥の考古学2006 (2007)
 第18冊 「とき」を撮る—発掘調査と写真— (2007)
 第19冊 飛鳥の考古学2007 (2008)
 第20冊 飛鳥の考古学2008 (2009)
 第21冊 飛鳥の考古学2009 (2010)
 第22冊 小さな石器の大きな物語 (2010)
 第24冊 木簡黎明—飛鳥に集ういにしへの文字たち— (2010)
 第24冊 飛鳥の考古学2010 (2011)

- 第25冊 鑄造技術の考古学—東アジアにひろがる鑄物師のわざ— (2011)
 第26冊 飛鳥の考古学2011 (2012)
 第27冊 飛鳥の考古学2012 (2013)
 第28冊 飛鳥・藤原京を考古科学する (2013)
 第29冊 キトラ古墳壁画発見30周年記念 白虎 玄武 朱雀 青龍 (2014)
 第30冊 飛鳥の考古学2013 (2014)
 第31冊 大和の美仏に魅せられて (2014)
 第32冊 飛鳥の考古学2014 (2014)
 第33冊 飛鳥の考古学2015 (2015)
 第34冊 飛鳥の考古学2017 (2018)
 第35冊 飛鳥の考古学2018 (2019)
 第36冊 飛鳥の考古学2019 (2020)

その他の刊行物 (2019年度)

- ・奈良文化財研究所紀要2019
- ・奈文研ニュースNo.73～76
- ・埋蔵文化財ニュースNo.178～181
- ・奈文研論叢 第1号
- ・発掘調査報告書総目録 大阪府編
- ・第1回考古学・文化財のためのデータサイエンス・サロン予稿集
- ・第2回考古学・文化財のためのデータサイエンス・サロン 古墳・横穴墓×3D 予稿集
- ・平城宮跡資料館 夏のこども展示「ならのみやこのしょくぶつえん—土の中の花鳥風月—」
- ・飛鳥時代の土器編年再考 奈良文化財研究所・歴史土器研究会共催シンポジウム
- ・藤原から平城へ 平城遷都の謎を解く
- ・奈良の都、平城宮の謎を探る 奈文研 第11回東京講演会
- ・平城宮跡資料館 秋期特別展「地下の正倉院展—年号と木簡—」
- ・奈良文化財研究所第124回公開講演会講演会レジメ
- ・奈良文化財研究所第125回公開講演会講演会レジメ
- ・ミャンマーにおける発掘調査法・遺物研究法等の考古技術移転を目的とした拠点交流事業報告書
- ・灯明皿と官衙・集落・寺院「第23回古代官衙・集落研究会研究報告資料」
- ・一本づくり・一枚づくりの展開1 (東日本編) 古代瓦研究9
- ・鴟尾・鬼瓦の展開I—鴟尾—第20回シンポジウム発表要旨
- ・五〇年二〇〇次のあゆみ 奈良文化財研究所飛鳥藤原地域発掘調査

- ・平城宮跡資料館 冬期企画展「発掘された平城2019」
- ・木簡 古代からの便り
- ・国宝高松塚古墳壁画蛍光X線分析調査データ集
- ・風景の足跡—考古学からの文化的景観再考—文化的景観研究集会（第10回）報告書
- ・藤原京右京九条二坊・九条三坊、瀬田遺跡 発掘調査報告
- ・ヴェリエル・コック・トゥリア窯跡発掘調査報告
- ・Report of the excavation of the Veal Kok Treas kiln site
- ・岸良鉄英氏寄贈東南アジア陶磁器整理報告1 シーサッチャナライ窯跡群 バン・コーノイ窯跡出土陶器編
- ・西トップ遺跡調査修復 中間報告9 中央祠堂基壇部解体・再構築編
- ・Survey and restoration of Western Prasat Top interim report 9 Dismantling and reassembling of the central sanctuary platform
- ・庭園文化の近世的展開 令和元年度 庭園の歴史に関する研究会報告書
- ・史跡等の保存活用計画—歴史の重層性と価値の多様性—平成30年度 遺跡整備・活用研究集会報告書

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2019年度	2020年度（予算額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	732,945	766,469
施設整備費	130,206	0
自己収入（入場料等）	52,143	52,143
計	915,294	818,612

土地と建物

単位：㎡

	土地	建物（建面積/延面積）	建築年
本庁舎地区	8,878.94	2,812.45/11,387.06	2018年
平城宮跡地区	※	10,630.53/16,149.67	1970年他
藤原地区	20,515.03	6,016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥地区	17,092.93	2,657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費助成事業（2020年4月16日現在）

単位：千円

研究種目	2019年度				（参考）2020年度			
	①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金		①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
基盤研究（S）	1	30,160	—	—	1	25,090	—	—
基盤研究（A）	2	22,880	—	—	2	25,740	—	—
基盤研究（B）	7	22,120	—	—	13	47,970	—	—
基盤研究（C）	—	—	20	20,085	—	—	17	14,105
国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）	—	—	1	3,640	—	—	1	3,640
挑戦的研究（開拓）	2	7,020	—	—	—	—	2	6,630
挑戦的研究（萌芽）	—	—	1	2,730	—	—	1	2,990
若手研究（A）	4	15,080	—	—	1	2,600	—	—
若手研究（B）	—	—	11	5,850	—	—	6	650
若手研究	—	—	7	8,320	—	—	16	18,590
研究活動スタート支援	—	—	1	1,170	—	—	1	—
新学術領域研究（研究領域提案型）公募研究	1	3,900	—	—	2	4,810	—	—
研究成果公開促進費（データベース）	—	—	—	—	—	—	1	1,900
研究成果公開促進費（研究成果公开发表B）（ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI）	1	330	—	—	1	490	—	—
特別研究員奨励費	1	910	—	—	1	780	—	—
計	19	102,400	41	41,795	21	107,480	45	48,505

受託調査研究

単位：千円

区分	2018年度		2019年度	
	件数	金額	件数	金額
研究	28	304,340	39	269,587
発掘	9	21,745	13	54,818
計	37	326,085	52	324,405

研究助成金

単位：千円

研究助成金	2018年度		2019年度	
	件数	金額	件数	金額
	11	12,210	14	22,806

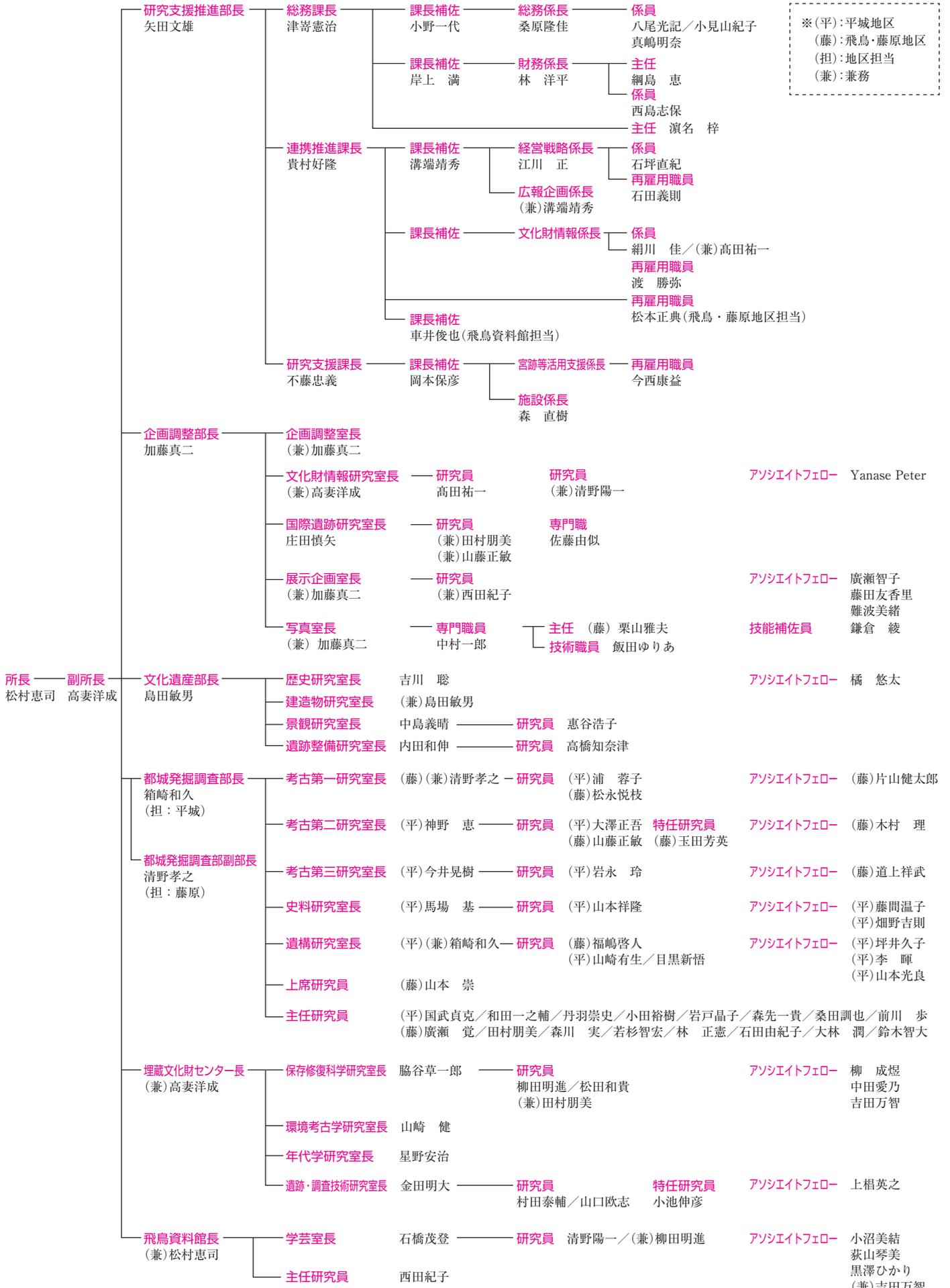
※採択年による集計

※二カ年にわたる場合は初年度に計上

令和2年4月1日現在

職員一覧

※(平):平城地区
(藤):飛鳥・藤原地区
(担):地区担当
(兼):兼務



客員研究員一覧

2020年4月1日現在

令和2年度客員研究員名簿

所 属	氏 名
研究支援推進部	渡 辺 伸 行
企画調整部 (企画調整室)	羽 生 淳 子
企画調整部 (文化財情報研究室)	小 林 謙 一
企画調整部 (国際遺跡研究室)	Shaun Ian Mackey
企画調整部 (国際遺跡研究室)	杉 山 洋
企画調整部 (国際遺跡研究室)	森 本 晋
文化遺産部 (歴史研究室)	綾 村 宏
文化遺産部 (歴史研究室)	山 田 徹
文化遺産部 (建造物研究室)	林 良 彦
文化遺産部 (遺跡整備研究室)	小 野 健 吉
都城発掘調査部 (平城・考古第一研究室)	中 野 祥 子
都城発掘調査部 (平城・考古第二研究室)	青 木 敬
都城発掘調査部 (平城・考古第二研究室)	深 澤 芳 樹
都城発掘調査部 (平城・史料研究室)	黒 田 洋 子
都城発掘調査部 (平城・史料研究室)	杉 本 一 樹
都城発掘調査部 (平城・史料研究室)	館 野 和 己
都城発掘調査部 (平城・史料研究室)	方 国 花
都城発掘調査部 (平城・史料研究室)	渡 邊 晃 宏
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	諫 早 直 人
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	上 原 眞 人
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	巽 淳 一 郎
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	松 本 啓 子
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	黒 羽 亮 太
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	竹 内 亮
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	青 木 政 幸
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	大 賀 克 彦
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	小 椋 大 輔
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	北 田 正 弘
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	金 旻 貞
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	肥 塚 隆 保
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	澤 田 正 昭
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	杉 岡 奈 穂 子
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	辻 本 與 志 一
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	中 島 志 保
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	中 村 力 也
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	難 波 洋 三
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	浜 田 拓 志
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	福 永 香
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	三 村 衛
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	上 中 央 子
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	大 江 文 雄
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	菊 地 大 樹
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	茂 原 信 生
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	中 橋 孝 博
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	松 崎 哲 也
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	丸 山 真 史
埋蔵文化財センター (年代学研究室)	伊 東 隆 夫
埋蔵文化財センター (年代学研究室)	児 島 大 輔
埋蔵文化財センター (年代学研究室)	光 谷 拓 実
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	小 澤 毅
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	狭 川 真 一
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	中 村 亜 希 子
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	西 口 和 彦
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	野 口 淳
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	平 川 ひろみ